

增補雅言集覽

四十四

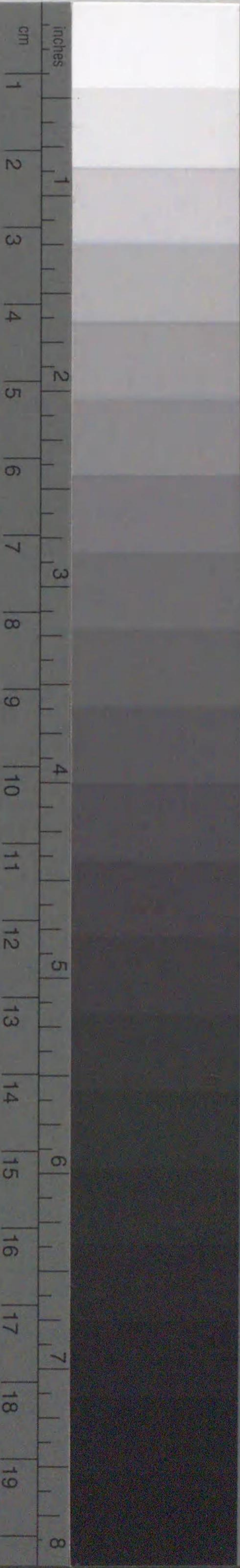
813.6
I 619g
NLS

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



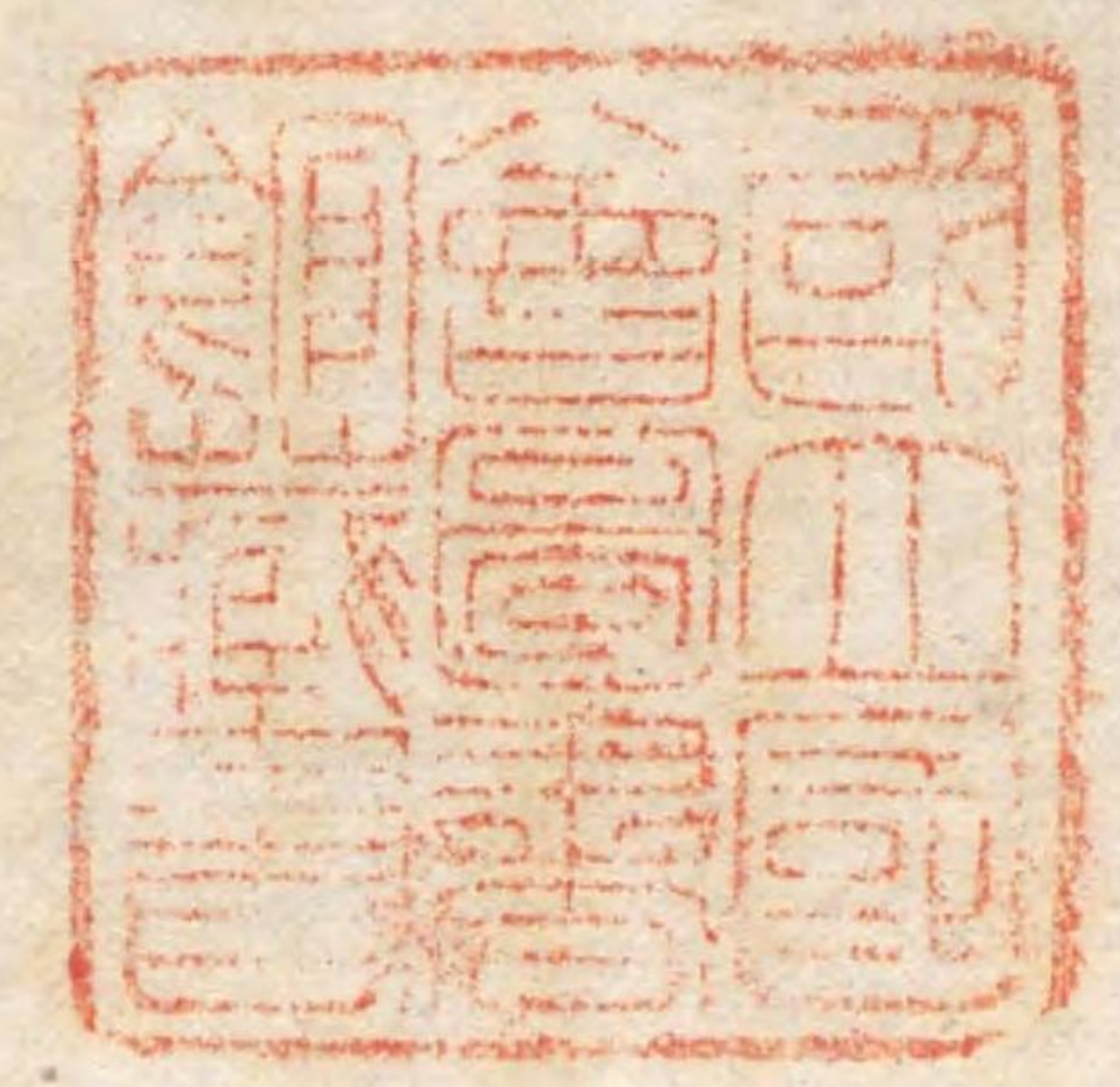
Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



813.6
I619g
NND



691360

増補雅言集覽卷之四十四

○安の部
あど冠(源桐壺)廿いみトきものゝふのあどりたきかりとも(伊勢集)(續古)上「我
とめは何のあどとり春りせのをしむとれる花を吹らん(六帖)上「わがためは何
のあさこの山かきや戀しと思ふ人のいるらん(空穂藤原君)「うらむきどかなく數
よもぬ塵やふりきあさこのみねとあるらん(源浮舟)六「いみトきあををおよ
つくりたまとも(伊勢物)卅「何のあたより思ひけん(古)四(戀伊勢物)百十「かこ
こそ今いあたかれこそかくわねとときもあらましものを(神代紀)上(二)不有奸
賊之心(續後撰)戀三(般富)門院大輔「たのをつるわが心こそそりかけき人をあどよ何お
もふらん(うつは)後蔭)二あどの風ふきてとつある舟ふさついそこをそれぬ(同)七
あどの風おねいなる浪あひて(千載)戀五(般富)門院大輔「かそりゆくけしきを見てもいけ
る身のいのちをあどよおもひけるりか
あどハカナル心也(貫之集)「あどかきと櫻のをこそふるさとの昔かぐらの物よ

會補雅言集覽

卷之四十四

一

有けき(源 松風)七たごあごよろちる人のあさむりかるかさらひよご(六帖)四

(古)衰傷ちゆきも「花よりもひとこそあごよかりよけきいづきをさきよこひんとりこ

(六帖)上六「八重をがらあごあるれば山吹の下よこをかけ井手の蛙(後撰)貫之

「ひさしりきあごよちるなと櫻花かめよさせれどうつろひよけり(古)上(伊勢物)

十七「あごありと名よこそてき櫻をかとよまれある人もまちけり(後拾)冬能宣

「霜がれの草のどさしあごかれどかべての人をいる、物り補貫之集」散ぬ

ともあごよ見ト藤の花行さきとすき松にされま(同)「ふるさとをけふ来て

こればあごかきと花の色のとむり也けり(古)興風「さく花のちくさながらよあ

たかれとたきり春をうらみとてさる(新古)秋上八條院六條「野べことよおとづきわさ

る秋風をあごよもかびく花す、きりな(後拾)哀傷定頼母「あごよかくおつとおもひ

ぬを玉のかとこそかぎかたみかりけき(新拾)下(貫之集)「藤の花あごよちりか

むときとかる松より、まるかひやかりらん(新後)戀三盛方「あごよかとおもひそめけ

ん朝つゆのおき別きてもきえぬいのちを(續古)雜下永観「よろこぶもかけくもあたよ

過るよをかどりいとふ心あるらん(玉葉)釋教慶政上人「あはよりのあごよ月日をおく

らトとおもひりともけふもくらいつ(万代)夏長時「聞人のあたよおもとぬ初聲を

あきまで、行ほど、ぎすりか(千載)釋教前大僧正快修「うきくぞ名をたもつよあごか

らぬとのりの花よ身をむまびける(金葉)秋顯輔「千とせまで君うつむべき菊なれば

露もあごよのおりトとぞおもふ(拾)物名よみ人しらす「花のいろのあらひよめでさあため

きぬいざくらやよよかりてかきん(伊勢物)六十一段「名よおとやあごよごあるべ

きたそれトまあとのぬきぎぬきるといふかり(千載)羈旅崇徳院「松がねのまくらも何

りあごからむ玉のどこと常のどころ(伊勢物)百三「いとまめトちやうよてあ

ごかるこ、ろかりけり(新勅)戀二修理「たらくともかよにりのせんくき竹のひとよ

ふたよのあごのふよを(金葉)秋顯仲「さ、がよのいどのとぢめやあたからんやこ

ろびわさるふちをりまらな(頼政集)「あごからぎまもるみりきのうちかれさ花あ

そ君よささらざりけき(續拾)冬周防内侍「あごよのつもり雪のいらよして雲るよ

かゝる山とかりん(同)雜春道生法師「あごよのみおもひり人の命もて花をいくさびを

いみきぬらん(同)宗泰「あら、吹梢うつらふ花のいろのあごよものこるみねの

ら雲(新後)雜上祐春「ちりやさ花の心とよきばこそあらしあごよさをひそめけめ

(玉葉)雜言「風ふけばあたはちりりふ花よりも老の泪ぞもろく成行(新續古)春下後久

我太政大臣「あごあやもふもとの庵よながむべき花よりいづるとねの月りけ(拾玉)五

「山川のあたよおもひうさりたのきえぬりせこそあやといさけ(月詣)五、覺綱法師

「夏草のつゆよとれる月夕のあたよむをべるつらなりけり(同)七、公景「風ふ

けばのるまがきもた下ろきていとどあどある朝が不の花(万代)六、永観「よろこぶ

もなけくもあどに過せよをあとをいといふ心あるらん(同)隆信「あどよのみうつ

ろふ花の色なれどそめし心のかへらざりけり(同)春上天曆御製「咲そむる所がらにぞ

櫻花あどよちるてふ名をさつかゆめ(新後拾)秋下貫之「露とてもあどよやの見る長月

の菊の千とせを過せとおもへ(新後)春下遊義門院「あどよちる程をもまたで櫻花つら

くもさをふ春の風りか(同)春下前内大臣「あたありやうその空かる春風よさをそれやそ

き花のこゝろ(同)葵八「あかりこあたよかといへば云々あどあることいまだ

からのぬ物ととて

○あためき(源末摘)「あためきたるもやり心うち思ひて(同)帚木初さしあど

めきめかれたるうちつけのそきとしさをどの好まうらぬ御本上よて

あたまぬこと(竹取)十、使詞かくや姫の罪をつくり給へりければ云々罪の限りも

てぬればあくむりふるを翁のなきをけくあたまぬことかりはやいたし奉れといふ

(夫)相摸「いづれをりまづうれへまし心よあたまぬことのおそくもある哉

あどへ(狭)卅一、下。道成詞云々おとぶこそ猶これ申直し給へをいひあどへつゝ、姫

りづきさるさぬをせちし引のけて顔を見るよ(同)廿九丸が顔のこよかくよきぞ見給

へく(あまへて古本)とあどへてさぬをせちしひきあんとするも(源夕霧)卅二すむろよかくあど

へかくして

補あたちのまゆ(万代)戀五、入道前攝政左大臣「陸奥のあどちのまゆと末たどといりかるり

たよなほをびくらん

あとり(邊)十、仁徳紀三和藝部能阿多利(源帚木)七もとの品時世のおぞえ打あひや

んてとあきありの云々(同)夕顔八あたりさへすさよ(同)末つむ初さてもやと

おぞしよるさりのれとひあるあたりよこそ(古事記)下二そよふ坂わがたちみれ

ばかぎろひのもゆるいへむらつまが家のあとり(阿多理)補(万)八、十九「春の野よあさるさよ

はのつまこひまおのがありを人よれつゝ(竹取)上いりて此かくや姫をえてい

がを見ていがかと音にきゝめで、まどふそのありの垣にも家の戸よもをる人た

またそやすく見るまよきものを

○あたり(源)補四物そりかひかるこしさをおほがきよて板屋ともあふりく

いとありそめかり(榮根合)七ささりり廣き院の内つゆのひまかく女房の局よあわ

たしおもものやどり進物所なごよさまとあさりくよあるたり(源若紫)四十御帳

御屏風あごあたりくよとてさせたまふ(同蓬生)三月のいり方になりて云々さそ

るべきとたどのさつやもなく軒のつまものこりなけれはいと花やあよさしひりさ

ればあさりくよみゆるよ(空穂國讓)中四かさくよおき給へるところとよあ

たりくよまんどころよりそとめてあさり(源東屋)八あたりくよあるべきかぎり

たる所を(同)廿このことかのこと、あたりくよのこととよ

(あさり)其人チヤン(源桐壺)廿源氏の君ハ御あたりさり給そぬぞ(同句宮)十母女御

もいとおもく心よく、物し給ふあたりよと(同柏木)三なめしと心おい給へらんあ

たりよもさりともおぞいぬるいてんく(万)廿青駒のあがきをはやみ雲るよぞ妹

タ當乎過てきよける(源夕顔)十この御ひりりをみ奉るあさり(同)四十あさりさら

せおぞしとて給ひしを

(あたり)相當(源若菜)上九。柏木ノ心けよとごひなき御身よこそあさらさらめとつ

ねよ此小侍従といふ御ちぬしをいひよけまして

(あたり)今イッ意趣(宇治拾)五先ヨ行綱よそられさるあたりとぞいひける(隆

信集)つらしとて我さへつらくあさるまよ人のうらみものこしつるりか

(あたり)源花の宴(三藤)こかたのつまよあさりてあきば御うしともあはわたり

て人々出るたり(同)神四十ことよたてられたる御堂の西の南よあたりて(備風雅)

為兼「見るとさき心よもあはあたりけりむらふみぎりの松の一もと

○身をあたりぬべく(空穂俊蔭)廿けごものよ身を施しつべくおぞえもしよどの

つものよ身をあさりぬべくもしよ世中よいみとさめ見給ひぬべらん時よ此琴

をばかきからし給へ(同國讓)五十。律師さるわざとひよかんあたりて侍り

(あさる)當(源壽標)四五月五日よぞいりよあたるらんと人しれぞかぞへ給ひて

(あたる)罪ヨ(源須磨)四十罪にあさる事ハもろこしよもわがみろとにもかく世よす

ぐれかよ事よも人よことよかりぬる人のうならせある事あり(同)神五十内々よ制

いの給んよきし侍らせバその罪よたごむづらあたり侍らんかと

○あたらん(源薄雲)廿かへりてハ罪よもやまかりあたらんと(空穂俊蔭)一、万劫の

罪ほろやさんあしきさまのがれんとてまわりこづくれるをおのが一分とかし何よ

よりてり汝が一分あたらんとさよいまままんとさる時よ

(あたる)月日ノ光(古)春上一春の日の光りよあたるわれかれどしらの雪とさるぞ

とびしき(後)秋下「梓弓いるさの山の秋ぎりのあたることよや色まさるらん(和

泉式部集)下「ちりよーのみよやくると櫻花風よもあて、をーとーものを補(拾)戀
よみ人「うらやまー朝日よあさるゑら露をわが身と今のあはよーもが
しらす

あざわざ(源 手習)二十念佛より外のあざわざかせそとーたあめられーうを(同)
五 卅もそらかゝるあざわざかどー給をせ

あたかたき(源 桐壺)廿いとどきものゝふあざかたきなりとも見ての打えまれぬべ
きさまのー給へれば(同 檳柱)廿いりをりりのむりーのあざかたきよりおさーん
どこそのおもほゆれ

あさりも(万)十九「吾せこが捧てもさるほゝりーのあさりもよるうあをきゝぬ笠
○甚よく似ることをいふ詞也(撰集抄)惣心の僧都のあたりも眠せゑの夕と侍り
(同)ひがめりと見ればあたりもまざるべくもさー

あさり(万)十三「ちらぬひのつくーのささいよつけていまさひさねとあたゝ
けくミゆ(源 末摘)廿七松の雪のさあさゝりけよふりつめる山里のこゝちしてものあ
それかるを(夫)四千里「あさゝけき春の山べよ花のみぞ所もさりせ咲とされける

あどね(六帖)上「人のさるあどねもせせで帚木や君を思へば夜ぞふけよける
あどねのとこ(夫)卅六般富「夕をぐみあどねの床のあけ方よをさるうさりー秋の

来よけり

あたら(六帖)上「露ふりき菊をーをれる心あらば千代のあた名いゝんとぞ思
ふ(源 夕顔)四十またもあど名の立ぬべき御心のささひかめり(同 蜻蛉)五十一「女郎
花みたるゝ野べにまどるとも露のあたなを我よりけめや(後)戀あひりて侍りけ
る女の人よあどあたちて侍けるまつりさーける(朝忠集)中將よてをら名たつこ
ろ中納言といふ人のあた名たつよ

あどかみ(金葉)戀下「おとよさくたりの瀆のあど波のりけトや袖のぬれもこそ
それ(古)戀四「そこひかき淵やいさわぐ山川の淺きせよこそあた波のさて(新
後)戀三「住吉のきーのあどなまかけてさ思るゝ草のありとーらけを(續拾)戀
紫式部「かへりておおもひりぬや岩々とようきてよりける岸のあどかみ

あたら(雄畧紀)阿拖羅陀俱彌幡夜(釋紀云)十二「わがこゝろとのぞみおもへ
む新夜の一夜もおち夢にーとゆる(今鏡)帝崩御ノみそちよいまひとつたらせた
まそでいとあたらー(住吉物)かゝのひとよとせんもあたらー(古事記)上天照

大御神者登賀未受而告知屎醉而吐散登許曾我那勢命爲如此又離田之阿理溝者地矣
阿多良斯登許曾我名勢之命爲如此登詔雖直(源 帚木)三御心のあそれかりけるもの

をあたらし御身をかといふよ(空穂 嵯峨院)七十あたらしさてもありぬべきおろやけ人のあやしうてもありつるりか

○あたらし(後)春下、さね「あさら夜の月と花とをおかたくの心あはれしれらん人よみせ

さや(玉葉)春上「あたら夜の哀をしるやよぶこ鳥月と花との有明の空(同)同家

「あるいらせとさきてのまさを梅の花よほふ春べのあさら夜の月

○あたらし(く)源東屋三あたらし(く)心ぐる(き)物よおもへり(う)つは(國護)中ノ

心もて身をいさづらよかいつる人にかそへと見侍れど猶これかんなあさら(く)う(一)

ろめたう見侍る(遊仙窟)阿情光頭物(躬恒集)「あさら(く)くてる月かけはほとゝぎ

すふるあゑしるくなきわたる哉此歌の可惜と新しと(拾)戀四、よみ「あさら(く)と何

よ命をおもひけん(す)まふふるくかりぬべき身を(榮 楚王夢)二御使ろく給とりて

まりづるなどかどの常のことかからそのをりのああめでさあたらし(う)えたり

(源 帚木)四十 此まゝ母のありさまをあたらし(き)ものよおもひて(同 桐壺)廿さゞ人

よ(い)とあさら(く)けれと(新續古)秋下「あさら(く)くわきのとやとん菊の花うつ

らぬさきよこん人もがな
○あたらし(ぐる)(源 若菜)下ノ世の中をいみあたらし(ぐる)りて

○あたらし(や)(夫)七「あたらし(や)賤が垣根をかりをめよへどつをりりのやへの

山ぶき(拾玉)三「あさら(く)やえぞがち(ま)の春の花がむる人もかくてちりか

ら(補)(月詣)六「あたらし(や)をさかこもれる(の)ま(き)さ(が)みま(く)さ(よ)り(つ)く(ま)

らん(拾愚)上「あたらし(や)鵜川のかまりさ(て)へていとふ川せのあり明の月(月

清)一「あたらし(や)門田のいさを吹風(月)りけちらを露の白玉

○あたらし(さ)(貫之集)「さくらよりまさる花かき春なればあさら(さ)をばものど

や(い)も(る)六帖下句あだし草を。雅望云此歌(新)し(大鏡)五 太政大臣伊周公の云々

かうやうの御榮を御覽(お)きて御年五十よ(と)たらでうせ給へるあさら(さ)の父

大臣よおとらせ給をせとこそ世の人をい(と)奉る

あ(あら)(新)万(万)廿年月の安多良安多良よあひ見れど

○あ(あら)く(源 夕顔)初ひがきといふ物あ(ら)く(く)ちて(後)春中、よみ「春雨の世

よふりよたる心よも猶あたら(く)く花をこそおもへ(躬恒集)廿一「あたら(く)く我のみ

や見ん菊の花うつらぬさきよこん人もがな
○あ(あら)く(後)哀傷、三條「いたづらよけふやくきなんあたら(き)春のそとめ

むら(か)がら(に)(素性集)「あらゆきと身のふりぬともあたら(き)春よあふこそう

れしりりれき(六帖)六、「あさらしき物よざりける神無月時雨ふりよし菊にのあれ
とも翻(万)廿五長歌あたらしき沢よき其名ぞ(万代)春上「あさらしき春くること
よふるさとのかたがの野べよこりなをぞつむ

あたるりせ(うつろ)俊隆上、もろこしよいらんとするそよあたる風ふきてみつ
ある舟二つもをこなれぬ(同)同さるを俊かけあどのかせおそいなる波よあひて

(同)廿同あとの風おほいかる浪よよよよとされて(同)樓の上上七故治部卿の朝臣々
もろこしの使よまうであたる風よあひて

あたくらべ(伊勢物)五十あたくらべかこよよける男女の志のびありきよけるこ
とかるべし

あどまれ(源玉葛)三此監よあたまれていさりの身トろさせんも所せくあんあ
るべき(平家物)廿七ノ一門よあどまれて此頃平家をへつらひけり(盛衰)十二此資

賢卿の今様朗詠の上手よて院の近習者當時の寵臣よておそけきば法皇諸事内外
かく仰あたまされけるよ依て入道ことよあどまけるとりや

翻あどまもる(万)廿七長歌あたまもるおさへの城ぞと
あたけ(源朝顔)廿まいて打あたけ過さる人のどしつゆりゆくまよいらにくやし

き事おろりらん(同)若菜上ノ一朱雀ノ源ノ上いでそのふりせぬあたることいといと
うしろめたけき(同)朝顔十ハむりよりのあまたへまさりておぞさるれば今更の御

あたけもかつも世のゆきさをもおぞしから翻(同)少女廿今さへかゝる御あたけ
こそといひあへり

翻あたふ(神代紀)阿黨播奴介茂(雄畧紀)與一夜而脈(古事記)美刀阿多波志都

(著聞)一十七御功德は食をりりを申あたらへ給へ

あどぶ(夫)廿六「あさとまる草のりりほのあどぶの月よもられてありそかり
けり

あどこと(源帯木)十あどことよもまめことよも(同)廿一そりあきあたることをもまて
との大事をいひあせせたるよりひあくらを(同)繪合三十よのつねのあどこと引

つくろひりさるるにおされて(空穂)藏開上四「あたること音よを聞し松山や目よ
みすくもこゆる波哉翻(源)繪合一廿繪の筆のついでよさひさせ給ふあどこ
とよこそ思ひさまへり

あどこ(竹取)上あたる心つきあは後くやしき事も有べきをと思ふさかりかり
○あどこ(古)東歌「君をおきてあたるをわがもたば末のまつ山波も

のむまトけれ(續拾)戀五真昭法師「よそよのとかるみの浦のうつせ貝されあた人よ名を

しらせけん(新續古)戀五後九條前内大臣「あた人の心を見えぬのが袖よせき入ておとを瀧

のあれども(源 玉うつら)六四十むかしのけさうのをかきいとみあひあた人といふ

いつもトをやせめどころようちおきて言のそのつゞきよりあるこゝちすべあめ

りかどわらひたまふ(同 紅梅)三十あた人よせんよさらひ給へる御さまをひひてまめ

たち給はんもと所をくかくやからまゝかど(古)戀五よみ人しらす「秋といへばよそよぞき

きしあた人のこれとふるせる名よこそありけれ

補あれ(枕)三十五殿もりづかさこそ猶ををしき物のあれ(同)三廿二わかき人とちこ

肥たるよしぞりやうかと云々よろぎよりの牛かひらんのかりあしくてもたるこ

そワロあれ(同)二四よくきものめどの男こそコあれ云々(同)十十四男こそ猶い

とありがたくあやしき心ちいたる物あれ(源 關屋)六あさけつくれどうもべこそあ

れつらきことおろかり

補あれ(マレノ意)下平忠度朝臣山里の花見侍けるよ家づといをらせやと申

つゝおしてはべりけれバ家づともまたをりいらせやまさくらちらでかへり春一

なけれバと申てとべりたる返とよ小侍「我さめよをれや一枝山さくら家づとよ

れ

○あるべけれ(枕)六世の中は猶いと心うきもの人よくまれん事こそあるべけ

れ

○あり(源 須磨)六世よおととぬるよそひの人たにありましてかれむつび聞え父

母よかりつゝあつゝひ聞えおろしてからひ給へれば

○あらめ(源 葵)七只今世に人の聲の滋野の宰相こそあらめ(千載)別上西門「かぎ

りあらん道こそあらめ此よよてとかるべといおものざりしを

補あれ(吾 榮 日のけ)五廿かうませしきさせ給ひよかバあれよもあらでありきとべ

りしかり(万)十一廿一霜の上よあられたバりいやまよあれのまるこんどしのを

ながく(万)十五廿三一人のうゝる田のうゝるまさいまささらよ國よかれして安禮のいか

ません(同)同「和我やどのまつの葉とつゝ安禮またんもやかへりませこひしをぬ

とよ目ガやどよわがといひ我身の目れ(同)廿「たちあへりかけども安禮波しるし

なみおもひわおれてぬしよしぞおろき

補あれ(貫之集)上「あれひきよ引つれてこそちのやふるかもの川あまうちこさり

けれ

補あれ 彼(著聞)十七 大納言あれの何ものぞとどひければおそれく(枕)八 あれがやうよいつの折どこそふとおぞゆれ

あれのたれとき(源 初音)十 おまへの梅やうくひもときてあれのたれときあるよ(河)たそがれ時也

補あれ 生(万)一ノか一原のひとり御世のあれま一神のことく
あれ 荒アルの所又出す

あれた 荒田(千載)戀五 「さゝめかるあれ田の澤よさつたまのみのさめよこそ袖ぬるらめ

あれまどふ(源 末つむ)廿いと哀まさびうあれまどへるよ(同 総角)八十 風いさく吹て雪のふるさまあはた、うあれまどふ

あれて(竹取)下 燕あか、ひよおとろくく二十人の人ののぞりて侍ればあれてよりまうでこむむ

あそ(仁徳紀)廿たまきひる宇知能阿曾をこそよのとはひと云々(万)十六、いつこはそあかよほるをかこもた、みへぐりのあそがそおの上ぞほれ(同)同「わらへ

べも草のかりそやはたでそづみのおそがわきくさをかれ阿曾の事記傳十五

五十一 詳かりまた雜問答考は姓朝臣名朝臣の事をどくひ

○あそむ 朝臣(源 少女)廿朝臣のいつきむすめいた、さてたらんあまのそぢかあるべきときいあめバ(同 帶木)四十 その姉君のあそんのおとうとやもたる(同 野分)六

此あそんさふらへむと思給へゆづりてかん(源 東屋)十よろづの事たらひてめやすきあそんめをかん定めさるそやさるべき人えりてうろををまうけよ(同 寄

生)五人めして殿上たれくぞとどいせ給ふよ云々 中納言源のあそんさふらふと奏を中納言のあそんあなたよと仰てとありて(空穂 俊蔭)二五 右大臣右大将御供

所=あやしくて失ぬるあそんたちちか(同 吹上)十 大将=向 仲忠よさまふべき物帝詞

國の内は覚えぬをあそんのみかん給ふべきとおほせらる(同 藏開)下ノ此事あそんと少將ともろ心よことり、をむあつりひ物とせらまよ(源 藤の末葉)九 内大臣

柏木(カシ)テ あそんや御やすみ所もとめよ(同 常夏)四 源氏君夕霧 朝臣やさやうのおち葉をたよひろへ

あそをす(狭)上、上 母代打見おこせてきら、くあそをすいつべう侍り今やうの手を草がちよこくうすく墨つぎまぎらひして打よろぞひて侍りつるこれいつよ

きもづりひ書るやうよ侍る(空穂 國讓)中、六日頃ひひるの御文あそよによるの御

手からひあくまでせさせ給ふ(同 初秋)上あるトのおとゞ右大將とまづあそびを云々
ことよあそびをばあてん心もなく云々 右大將のおとゞおいらり立はりあそびを
そよ(同 藤原君)七十侍従の君と御琴あそびをす二の宮御琴あそびを(蜻蛉日記)下。
歌これが返し今一度せんとしてかりらまでいあそびをすたなるを末かんまたしきとの
給ふ也ときよて(空穂 初秋)下五御琴あそびをすかどるるを(同 國讓)上四をりしき鞠
のりりりかどけうありとて鞠あそびを(枕)十四心ときめきするもの、兒あそびを
る所の前わさりたる(同)二兒のめのとのたゞありらさまとていぬるをもとむれさ
とかくあそびをすしなぐさめて(源 ありし)十。筆ノ 入道いはいかくうちゑとてあそ
びよりかつりしきさまあるいづこのり侍らん(同)をどめ十猶あそびをさんやと
て秋風樂よあそびをせせてさうり志給へる聲いとおもしろけき(新千)上。還幸
の時の障子よ御製をあそびをすしつけられて侍けれバ

あそぶ (雄畧紀)三 逍遙於郊野(古事記)中 我天皇猶阿蘇婆勢其大御琴(伊勢物)三
段むりるかりわたらひしける人のことものもといいで、あそびけるを(武烈
紀) 志せのなをりをとれば阿蘇寐アソボシ俱屢志びがたてし妻たてり見ゆ(此詞の事
廿四葉四十二ノ
三四葉ニ委)

あそぶ (遊系 堀次) 遊系 (夫) 三 俊頼 「さゝがよのくもらぬ空のいとあそびあそぶ
けしきのことえせもあるりか(堀次) 常陸 「そるト」とあさとりなる大空よあそぶ
いとやながめくらさん

あそび (源 御法) 七 まして夏冬の時よつれさるあそびとふきよ(同 東屋) 廿あ
そびたひふれ給ひて(同 若紫) 一 君の紫ナ わりき人々かどあればもろともよあ
そびて 云々(同) 四十 例のやうよあそび給とせ(同 柳) 八 文つくりあふさぎか
どやうのまさびとさどをもよなど 云々 宮づりへをもをさし給とせ御心よま
かせて打あそびておとる(同 篝火) 四 おもしろき笛のねさうよ吹あそせたり中
將の例のあさりとかれぬとちあそぶよぞありける(同 少女) 十 猶あそびさんやとて
秋風樂よかき合(補 著聞) 十二、よべあそびとてまうけたるなり 此あそびの盗
事人の物ぬすむ

あそび (管絃 源 若紫) 卅 御あそびもやうしをりしき比かれ(同 末摘) 廿 例の御あ
そびから大ひちりささくそちの笛かどの(同 御法) 六 物の上手とめてのこさぞあ
そび給ふ(同 帚木) 三 よるひるぐくもんをもあそびをももるともよして(同 柏木) 十
月のおもしろきよ夜ふくるまであそびをぞ給ふ(同 桐壺) 十一 やうのをりの御あ

そびかどせさせ給ひし(宇治拾)一と一頃此あそびごとをたつれども云々此翁りや
うの御あそびよりからせまるれといふ

あそび(遊女(源 溥標)廿六)あそびどものつとひまるれるも上達部と聞ゆれどわりや
し事このましけなるい皆目とゞめ給ふべりめり(更科日記)八ふもと(足カヲや山ノ也)

どりさるよ云々あそび三人いづくよりともかく出来たり五十さりりかるひとり二
十さりりある十四五あるとありいそのまへよからりさせさへせてすゑたりをのこ
さも火をともして見まむりしこそたといひけんがまをといふ髪いと長くひたひ
いとよくあゝりて色白くきたかけなくてさてもありぬべきしもづりへなどよても
ありぬべしあど人々あそれがるよ聲をべてよるものなく空すそのやりてめでさ
く歌をうたふ云々ましぐよのあそびのえりらトなどいふをきよて難波さりま
くらおればとめでさくうさひたり云々(同)秋頃和泉よ下るよよさいふよりして
道のそとをりしうあわれあることいひつくすべうもあらせ高瀆といふ所よとゞま
りさる夜いとくらきよ夜いさうふけて船の楫の音聞ゆとふをきばあそびの來るあ
りけり人々けうとて舟をさしつけさせたりとほき火の光よひとへの袖長やりよ扇
さしうさして歌うさひたるいとあそれまみゆ○朝野群載遊女記 長門本平家物語

新猿樂記

永承五高野御參詣記

宇治殿高野詣記

住吉物語等ニ見ユ

あそびわざ(源 紅梅)五そりあそびあそびわざともかたを師のやうよおもひ聞えて

ぞそれもからひあそび給ける(同 少女)卅一もろともよあそびわざをもしてあそび
よと思ひたまへてかん

あそびがたき(源 若紫)卅七御あそびがたきどもの(同 溥標)卅八うへよよき御あそび

りさきよおぞいさり(同 句宮)七春宮もつぎくの宮たちもかつかき御あそびが
たきにてともかひ給へば(枕)十二上よも御けしきよくて常よ召つゝ御あそびかぞ

のかさきよおぞいめしるよ(空穗 くて宮)十東宮テ宮万の事せぬとさかく上手
まものし給へる御あそびがたきよし給ふ(落く布)四わりうおぞしける帝よおぞし

ませあそびがたきにめしつりひをりしきものよおぞし
あそびたのふれ(後拾)釋教遊女宮木一つの國のかよそのことりのりあらぬあそびたそふ

れまてとこそきけ(維摩經)至博奕戲處軌以度人
あそびくさ(源 桐壺)廿一今よりあまめりしうもづりしけよおのすればいとをりしう

うちとけぬあそびくさよたれもし思ひ聞え給へり
あそびもの(狹)卅三中をりしきあそびものども奉らんと給へば打うあづき給へる

も(同 若紫)四十九かつりううちりたらひつゝをりきゑあそびものどもとりにつ
 りてみてさせたてまつり御心よつくべきことゞもを給ふ(同 若菜)上三御たりら物
 御てうとゞもをささらよもいとをたりかき御あそびものまではよゝゑあるがさ
 りをさ此御方よととたり奉らせ給ひて

あつ充(白文)六種穀充盤源 葵五十大將の君の御りよひ所こゝりことおぞあ
 つるよ(同)八物かぞゝせ給へどさして聞えあつることあり
御頼ノコト

あつい(源 澤標)三大宮もたのもりかくのこあつい給へるよ(同 御法)三峯をへど
 てあひみ奉らぬすみりよりけをかれんことをのみおぞまうけさるよかくいと
 たのもりけあささまをかやとあつい給へばいとこゝろぐるよき御ありさまを

あついもの(空穂 嵯峨院)六お前のくち木よ生ひたるくさびらどもあついものよさ
 せよがさなかとてうとて白りねのかあまりよいつゝまるれば

あつとこひ(文選)九北山移丈跨アツキ屬城之雄この跨の字をよませたり注よ越也とあ
 り訓義解いぐた

あつる(源 帯木)四それりかれかかどとふ中よいひあつるもあり

あて(源 夕顔)六袖を御りほよおとあてゝあき給ふ補(榮 日蔭)七歌のりたよさも

あるべき人どもをあてさせ給へるあるべし

あつりいう(枕)九此をよしたよいとあつりいすてまねしりりいびつの

まよかう成ぬらんと思ふをり(源 常夏)初水のうへむとくなるけふのあつりを

いさりを此詞アツキノノミイニハル(同 総角)五くち木よかしてをせもりかど人い

れぞあつりいりおぞ侍れと注もてあつかい(同 螢)五いとあまりあつりいりい

御もてあなり注ウツラハ(同)六あつりいりささとたれ髪のをたるよもいらでり

き給ふよ(狭)三五きくよさへぞあつりいりきよるの衣かりける

あづり預(源 拍木)四鷹の事をその方のおづりりども、皆つく所かく思ひうん
 ぐて(同 夕顔)三十りのこれをつがあづりりのかいまみのいとよくあをいみとりて申

ぞ(同)三廿あづりりいみとくけいめいありくけいよ(同)二廿あまがりの院におそ
 いまいつきてあづりりめいいづるほど(同 末摘)七御車出べき門のまごあけざりけ

れゆりぎのあづりり尋出たれや翁のいととよきぞ出きたる(蜻蛉日記)中下按察の
 大納言のりやうと給ひ宇治の院よいより云々此あづりりけるものゝまうけを
 いたれや(狹)四中御堂のあづりりさちさる僧の御ありりのさえたるともいつぐ
 とてとづりよいできさるを(源 松風)三五りなどしてかたのこと人すよぬべくいつ

くろひをかされかんやといふあづかり此年をらうる人もの給ひせあやしき
やふよなりて侍れ補同若菜上ノ一のびてさるべき御あづかりをさためおかせ
給ふべきよなん侍ると奏し給ふ古序御書のところのあづかりきのつらゆき大
和物五鷹ノよるひるこれをあづかりてとりひ給ふほとよいろゞ給ひけんを
ら給うてけり

あづかる新後天台の法門御尋まあづかる事代々よなりぬる事をおもひて

あづかりたる枕八こまき物のけあづかりたるけんトヤ

あづけ伊勢集廿春宮の女御の御方の花の賀まゆあづけられたりけるにメ
ハナル大和物一とこまいろゞ染させ給ひけり源夕顔十むせめをばさるべき
めよりくまよりとまあづけてせさせ給ひけり源夕顔十むせめをばさるべき

人よあづけて同若菜下さるべき人あらばあづけて土佐日記云々家をあづけた
る人の心もあれたるありけり中垣こそあれひとつ家のやうなればのぞとてあづ
れるなり榮見とてぬ夢四伊周花山十射ル所十いりゞすべきと聞え給へ隆家いでたゞお

のれよあづけ給へれとやすき事とてさるべき人二三人ゞ給ひて
あづかり源手習九とるりぎりあづかりひさわぎけり同東屋廿か君の御あづ

ひをしておとせる御ありさまうらやましくおせゆるもあわれかり榮見とてぬ夢
廿よろづよあづかりひ聞え給ふ源帚木四十まことよおやめきてあづかりひ給ふ俗
イッ意也同紅葉賀廿源ト内侍四人々も思ひの外ある事をおとあづかりふめるを頭
中將さつつけて同初音三たいこのあざりの君の御あづかりひ侍あと同寄生五
四こまやりある事までもあづかりひらせ給ふとて同をどめ三四十うろとおせ

と聞え給へばとの給ふまの御心よてあづかりうあそれ思ひあづかり奉り給
ふ同夕霧三此人ひとりのとあづかりひおこふ狹一四此人くくてやと侍りか
バ御まへの御あづかりひをいかにせつらうまつらん源手習十かくくさゆむをり
なくをひ給ひてあづかりひ聞え給ふ同八十よき君たちをむこよして思ひあづかりひ
るを同若菜下五御むねとやと給ふ人々見奉りあづかりひて御せうを聞えさせ
んと聞ゆるを同夕顔六もうさのこを思ひ給へあづかりひ侍るやど補夫廿七

「山がらのまをくくるみのとよかくよめてあづかりふ心かりけり源若菜下四宮
さちの御あづかりひかどとりもちて給ふさまも同鈴虫七か御あづかりひよてか
んいそぎつらうまつらせ給ひける同舟廿あふあき御ありまよこそはとあづ
ひさまゆ榮つほみ花七此ごろのすこころのどりやよてどの御まへよりよ

ひをいしておとせる御ありさまうらやましくおせゆるもあわれかり榮見とてぬ夢
廿よろづよあづかりひ聞え給ふ源帚木四十まことよおやめきてあづかりひ給ふ俗
イッ意也同紅葉賀廿源ト内侍四人々も思ひの外ある事をおとあづかりふめるを頭
中將さつつけて同初音三たいこのあざりの君の御あづかりひ侍あと同寄生五
四こまやりある事までもあづかりひらせ給ふとて同をどめ三四十うろとおせ

と聞え給へばとの給ふまの御心よてあづかりうあそれ思ひあづかり奉り給
ふ同夕霧三此人ひとりのとあづかりひおこふ狹一四此人くくてやと侍りか
バ御まへの御あづかりひをいかにせつらうまつらん源手習十かくくさゆむをり
なくをひ給ひてあづかりひ聞え給ふ同八十よき君たちをむこよして思ひあづかりひ
るを同若菜下五御むねとやと給ふ人々見奉りあづかりひて御せうを聞えさせ
んと聞ゆるを同夕顔六もうさのこを思ひ給へあづかりひ侍るやど補夫廿七

かりこりせりての御あつらひよわたらせ給ふよ

あつらひぐさ(源 句宮)十一條の宮のさるあつらひぐさも給へられでさうとて

よむりへとりて奉りたまへり(狹)三ノ上。今姫入内めでたきまつけても世の人の

ものいひのきよくきものよて此頃のあつらひぐさよこそいひの、りけれ(源

権の本)冊まづ此君ごちの御ことをあつらひぐさよ給ふ

あつらへ(誂)十訓抄(十一)康定と申者よ縁よふれてあつらへて候と申けり(履中紀)

誂之云々(アトラヘテ)持其誂言(古)八(春下、よみ)吹風よあつらへつくるものからバ此一もとの

よきよといたまへ(新勅)二(雜)西行法師自歌を歌合よつぐひ侍りて判の詞あつらへ侍

りけるよ云々(俊成)新千(離)貫之集「あつらへて忘るふと思ふ心あれバ我身よと

くるりたをかりけり(千載)下(雜、長歌)近きとめよ堀川のかがれをくみてさぐかとの

よりくる人よあつらへて(李花集)「今よりの物おもへとやをぎの葉よあつらへ

つくる秋の初風(職人歌合)詞何のためよあつらへ給ふやらん

あつらへ(白文)十四(廿九)王昭君時年十七漢使却廻(憑)寄詔

あつらへ(宇治拾)一(廿八)たよあつらへしきて云々きぬのこたあつらりある

あつむる(集)源(源 帝木)十世の有さまを給へあつむるまよ

○あつまる(源 柏木)廿うへおとよなどおと集りて(同 若紫)五十やうく人まる

りあつまりぬ

あづま(和琴)源(竹川)一妻戸おあけて人々あづまをいとよくかき合せり(同 花

散里)初よかる琴をあづまよらべてりきあせ(同 若紫)四十あづまをがぐき

て(河海)あづまの和琴の惣名なれども又東調とて秘曲あるなり(後拾)二(雜)女のもと

よまくりりりりけるよあづまをさし出て侍りければ「あふ坂のせきのあなよも

まど見ねバあづまのこともあられざりけり(源 常夏)九あづまどこを名もさちくど

りさるやうあれど

あづま(吾妻)伊勢物(七)京よありわびてあづまよいきけるよ(景行紀)八(時)日本武尊

下有願弟橘媛之情故登碓日嶺而東南望之三歎曰吾孀者耶故因号山東諸國曰吾孀國

也

あづまをどこ(源 寄生)二十あらまよあづま男のこよものおへるあまた具いて

(狹)一ノ下

あづまをとめ(千載)戀三「あさてをあづまをとめのかやむしろよきまのびて

も過すころかな

あづまこらと(年中行事歌合)女叙位「そるあふあづまこらんのこゝろまで君がめぐみをさぞあふぐらら〇内侍司のひくわんよあづまわらんのといふものありをゆきの時ひめ松とてをりき馬よのりてをぶさるこれごとなり是の三子をもちるらるゝとや申侍り三子と天子のまもりよである由緒も侍るよや
あづまらけ(新六)五「一つのをがあづまらけの麻をろもふまゝ川にさぞと
たるらん

あづま(源 寄生)九十「こやなよやとこあたよもいれさるをあづま人もよもくはせなぞ

あづま(催馬樂)東屋「あづまのまのあまりの雨を、ぎ我たちぬれぬそのとひらりせ(後拾)戀三、康資王母「あづまのりやりたぶとどるればいまや月日のゆくもいられぞ(千載)戀四、親隆「あづまのをがやの軒のにお草志のびもあへせしるおもひよ

あづま(源 東屋)五十「あやしきあづまこゑさるものどもさりのみ出入り
あづまあそび(源 若菜)下、十六「こまもろこゝのこくよりもあづまあそびの耳なれたる

あづま(河)東遊、舞樂也

あづま(東女)頼政集「あづまめとねさめてさけ下野やあそのりらよ千鳥かくなり

あつけ(夏)つ(空穗)初秋、上、十五「ひでろあつけにや侍らん(同)國讓、上、一「かさへんあつけあとよやとぞ見給へ侍る日頃、かくこくねちの比よ侍ればくるうてうちよもまるり侍らぞ(落窪)三女君、あつけよやあやまうてみ給そねバ(狭)夏つりたより母うへかやまうたに給ふをれいもあつけよのさのこをと云々(聖濟摺録)三十中喝論、俗號暑氣とあれ、醫書より出たるとかへ也

あつ(枕)七、十五「くるみいろといふあつとあつとをあやと見てあけもてゆけバ
あづさ(永久四年百首)賭射「そるさてバあづさのまゆと引つれてそりさのうちにまどるをぞする

あづさ(肥後國八代郡五家莊大鹿嶺産梓一名猪子柴今も土俗あづさの木といふあり

あつ(宇治拾)八、八「ふとさ糸してあつととこまりよつよけよさるをもてあつき(熱)源 若菜、下、十五「いりかる御こ、ちどとてさぐり給へバいとあつくおん

すれば(同 夕顔)御ぐいもいたく身もあつき心ちして(同 総角)七十御ぐいあどす
こいあつくぞおそしける

あつきく厚(源 玉葛)四十五いとろうそしきみちのくまがみのそこしとへあつき

がきをみさる(堀太)水肥後「冬ふりと氷やあつくとちつらん音さえまけり谷りの

の水

あつきおもの(夫)六廿あつきおものといふものをひとりの桶にいれて

あづきトマ小豆島(應神紀)あいちーまいやふさからび阿豆アツキ枳キ辞ジ摩マいやふたからび

あつ一暑(伊勢物)四十五とあづきのつごもりいとあつきころそひ(源 帶木)三廿あつ

さまみどれ給へる御ありさまを(万)九廿二熱爾アツキあせりきをけき

あつ一く(源 桐壺)初いとあつ一くかりゆきものころがそけよさとがちあるを(同

溲標卅うへいとあつ一うおそしませもおそろ(同 若紫)四十一と一頃もあつ一

くさな過給へる人よそひ給へるより(空穂 樓の上)下四今いやう一身あつ一く侍

るよ此手つとへとめん事いまい誰よりいと侍るを云々(同)下五内侍のりとも身

もあつ一う物し給ふうち云々(持統紀)篤癰アツキ(雄略紀)遣疾ヤレ彌留アツキ(二代實錄)十五五遂

稱病篤屢以取假(神代紀)上一靈運アツキ當遷通證四二丁才戸令(戸令)惡疾癲狂二又癡兩目盲如此

之類皆爲篤疾云々凡年八十及篤疾給侍壹人(前漢書)外戚傳初原夫人病篤(說文)人

疾甚曰篤(史記)范睢彼應侯遂稱病篤(契沖云)紀(彌留)あつ一れとあり病のおも

る意あり篤癰アツキをあつとよめるよあいせておもへた病の輕きを薄しといひておも

きを厚しといふよ(源 若菜)上二もとよりあつ一くおそしませうちに此たびいも

の心をそく(同 夕霧)七れいもあつ一うのみ聞そべりつるからひに

あつ一さ(源 桐壺)六そのと一の夏とやすどころをうかきこちまわづらひてま

であんとし給ふを云々としころ常のあつ一さ一あり給へれば御めかれて猶をそ

心とよとの給をさるよ(病)がちよかりて熱氣のあるをいふからんほどをるなとい

ふもみを熱氣有て身のあつく一る一きを云をれよりして(轉)た一病た一し一事

よいふのそのことわりあるよ似たり(信友云)小町集一一人忘れぬわれがおもひ一

あぬまの身さへぬるとておもほゆるりか源夕顔一御く一もいたく身もあつき一

こちして同若菜御身もぬるとて御あ一ちもいとあ一なれば同手習うちとへぬると

かどおとまへるよどのさめ給てさ一やうよ見え給へバナド一アリスベテ病者ハ身一

熱ノアリテアツキモノナレバアツシウナド一イヒナラヒタルガ末ニハ病トダニ一へ

バアツシナド一ヘルヤウニナリタルナラン

あつもの(允恭紀)十御膳羹汁(源若菜)上ノ御ウハらけくたり若かの御あつものま
ある

あねあるひと(源 帚木)四十いとかいあきおせせと侍ありあねある人よの給ひ
みんと申をもむねつおれておせせと

あねま(好忠集)「神まつる冬いかりをよかりよけりあねまがねやよさうきをり
き(新六)冬夜「冬きていあねこがねやのたうをがきいくよまきまの風いさむけき
知家

曾丹集標注云あねこ姉兒り新六帖知家「冬きていあねこが閨の云これい全く此
好忠の歌に依てよまれいと見ゆさておもふあねこ木ねら字の形似たれば木ねら
の誤いあらせや今此歌十一月神祇の歌と見ゆれば木ねらよて似つりいよくおせ
ゆ禰宜をさねとよめる事いと多りる中よも廣田社歌合仲綱「けさみればさねがま
ろねのあとかれやいがさのうち雪のむらさえ

あねま姉君(源 帚木)卅此あね君やまうとの後のおや(古事記)上、四荅白我姉石長
比賣在也

あか(古語拾遺)一事之甚切皆稱阿那(古事記)上、四阿那陀麻波夜(躬恒集)(六帖)上、
「ねたくわれ子日のまつよならまをあかうらやまいひとまひりる(兼盛集)五

「あなこひい雲まの月よ人をとておもけけにのみそへるころり(六帖)五、「こま

笛のこまに我のりかぐさめんときともいそトあなまくけとも(古)物名「あかうめ

よ常あるべくもえぬりあこひりるべき香いよほひつ(同)戀四よみ「あかこ

ひい今もみていり山賤の垣をよさける大和をせ(同)人不知「とりとむるもの

よいあらねいと月をあそれあかうと過つるり(拾)秋よみ人「あら露のおく

つまよする女郎花あかこづらい一人を手ふきを(催馬樂)安名尊 ああふとけふの

たふとさやいよへもそれ(源 帚木)三いであかりかいかくそおせかりよける

よかどやうよ(同 行幸)廿あかめたや(同 空蟬)十一いらへもさりであかそらく今

聞えんとてすぎぬるよ(拾)戀一、小野宮「あなまひいそつりよ人をとづのあわのき

えりへるともあらせていがを(源 夕顔)九ふとどろりすから白の音も枕上とおせ

ゆあかみりりがまいとあれよぞおせさる(同 帚木)卅まろいそいね侍らんあ

かくるいとて火りいけかどすべ(補)万代(戀四)「あかまひい雲まの月よ人を見て

おもかたよのみそへるまろりか

あかい(案内)狹上中門の方よ人のけそひのるをみやま何のまようかどよや

ありけん太刀もきたる人のおいあさいのぞきつあないするととゆれば(源

浮舟六十あのでろきあしめせむ女房の御もとよちらぬ所の人かよふやうよかん云
そのあかいとひきゝらん二狭上十六さりとちなるべする人ありつらんかどめさま
いくみドけれ人よとひあない給ふべきよあらね二同下五こよひの程よ
と奏して案内候へとの給すれど枕十四心ときめきせる物よきをどこの車と
めてものいひあかいせさせたるうつは嵯峨院廿なやと給ふとあるのまことりそ
らでとりたしよあないしていへとの給ふ同樓の上下十九あないもちらぬ人の大
將のひとつ御そらのかめりときこゆ源浮舟十昔もかこのあないしれるもの二
三人枕九家ぬしをきばあかいをよくしりてあけてなり源蓬生四ほとりよつき
てあないし申さるるを圃榮つはみ花五人々いみづくまらまろしうあんかい申
べ一狭三下うへの御まへぞつねあさまやとあかいしつたづねさせ給ふを源若紫二冊
せうそこせよとのたまへば人いきてあかいせさせ同薄雲廿九此ことをもしもの
ついでよ露をりりよてもらし給ことやありしとああいし給へど細ヤカニ
也同若紫上廿まづりの弁してぞりつゝあかいつたへ聞えさせ給はる狭三上かく
とあかいつとへ侍らん
あかいとけな源若紫下八あかいとけかどて云々

あかいとち源末つむ十六あかいとほしと命婦のおもへど

あかいみ源蓬生四あかいみトや人の聞おもせんこともおやりり

あまよく源あふひ九れいのあながちかりやあまよくとみゆるよけふのよとわり

あまよく源柏木五どらよよむをいであまよくや罪のふりきみよやあらんざら

いの聲たつきいといとけおそろしくて

あなよや古事記上伊邪那岐命先言阿那邇夜志愛哀登賣哀

圃あなり小大君集これのミを人のあふきはあり榮花山五それりれこそ

ついでそるものいあかれかどくせくしうの給はそれ同玉のむら菊六年中

行事の御しやうトよもりきそへられさることどもいとおろくかんあなる源薄標

七十六日よかん女よてたひらりよものし給とつけきあゆめづらしきさまよてさへ

あかるをおぞよ同若紫三心まづりし人むかる所よこそあかれあやしうも

あまりやつしけるりあ同蜻蛉十八まのちろくしてむらりあるのあどさや

うの人のいふことあかるをおもひてことをぐかりけんり同行幸四十九いめんよ

聞えまほしなることもあかりときこえ給へり伊勢物六十かゝれば此女くらよ

こもりながらそれよぞあかるといきけど(同 蓬生)十一いづれり此さびしきやどよも
りからむわけたる跡あかるとみつのみちとたどる(同 若菜)上ノあそれかる御ゆづり
よまそのあかれ(同)六いとくほしなるをりもあなるをや(同)下四五世よ久し
らぬためしもあるをと

あかこる(源 楨柱)四十。近江たかゝし小舟漕りへりおなト人をやあかわるやとい
ふをろイ

あかがち(源 白宮)六例の左あかがちに勝ぬ(同 紅葉賀)六打を給へるがいとゆ
しう、つくしきまわが身をがらこれよ似たらんといとトういよとさうおやえ給ふ
ぞあかがちあるや(同)四ひと日の源氏の御夕顔ゆ、しうおやされて御せ經をど所
所よせさせ給ふをことごとりとあそれがりきこゆるに春宮の女御のあかがちありと
よくまきこえ給ふ(同 夕顔)初ちさまよふらんおもつりよおもひやるよあながち
よよけさりき心ちぞもる(同)十頭中將のどこかつうたがさくかさりしころざ
ままづおもひいでられ給へど志のぶるやうこそいとおあがちよもどひ出給せぬ
(日本紀)強ガナ鈴屋翁云孔穿アツカサの意あるべし(宇治拾)九増賀をよあかがちよめ
はの何事ぞ心得られ候せぬ(源 若菜)上ノこりあきさそりあるもあかがちよめら

ひたせけつ、まるり給ふ(同 須磨)六いとあかがちよも聞え給せぬ(詞花)上

好「そりまあるるりまよをむるあかがちよ人をこひしとおもふころりか(拾玉)一

「あかがちよ何いとふらん前の世のむくいよてこそこひしるらめ(同)同「あか
がちよ何みざるらん苅りやのわきても風の吹ぬものゆゑ(同)同「あかがちよいと
ふをしひてこふるりかりたおもひとこれよやあるらん(宇治拾)一かくまでおや
しけることぞあながちよ侍ける事として(同)さくらのちらんのあかがちよいり
せんくるしりらぬ(同)十一云々すでよきたれるなりあかがちよせむべりらぬ

あかりよそらいし(源 若紫)廿あかかたそらいしやいり聞えんとおやよづら

あかりよトけか(源 蜻蛉)七侍従あなりよトけか今さら人のちりきこえさせんも

あき御ための中々めでよき御をくせよゆべきことなれど

あなりま(源 御法)五女房のあるかぎりさよぎまよふとあなりまをよとよづめ顔

よて(同 帚木)三人々わらふあかりまよとて(同 夕顔)卅よるの聲のおどろくしあか

りまといさめ給ひて(高光集)うちよけてもあらぬ人をこりあき所よひきとよめ
てかくやのとつまよトきをかくればあかりま人きくらんとよぶれば(万代)戀一
好忠

「おりさちて忍びよ淀のまこもかるあかりましらぬ人のきりくよ(金葉)戀下よみ

「かーがまー山のーと行さゞれ水あかりまこれもおもふ心あり(源 浮舟)十あかり

まさまへよこゑのさゝめくしもぞのーがましき(同)廿あかりまくと下はかどのち

りさりりもきゝたらんよ(同 若菜)上ノいであかりまさまへみを聞て侍り(同 明石)

四十あかりまやおせすつまどきことものー給ふめれば(同 玉葛)廿あかりま

まへ大臣たちもあまゝまて(同 行幸)廿女房あども耳とゞむれとのさまへばあなり

まみなきゝて侍り(同 手習)九あかりま人よきりまを(落く)一さらせのあかりま

とてもやとあんりーとのさまへば(同)同こさち北の方よかくかんと聞ゆればあ

りま落くぞの君よきりまを(更科日記)あねある人あかりま人よきりまをいどをり

一々かるねこやかさんとあるよ(清少納言集)すたれのうちを君さちおそーくと

いひければあかりまさまへと(頼政集)「これをのそ日をりぞへつゝ待けるりあな

りまさらば花よきりせと(かけろふ日記)上、下いひおこせたる僧のうさげそしきかり

あかりまいとよくけあしとてやとぬ(同)中、下やうくゝゑひ過てあかりまやをいふ

こゑきこゆる(同)同うまのりみおそーたりといふあかりまこゝましとこたへよ

(狹)上、下のびてとらへばあかりまくと手りき給ふ(後拾)釋教「まどちらぬ花も

やあるとたづね見んあかりまうしかまし風よーらすか(伊勢集)「おとあしの山のーと

行さゞれ水あかりまわれもおもふころりか(狹)下、あなりまやくとささりりもづり

いさ御ありさまよ(同)上、いまぞちうよりおそーたるあかりま給へいりあるよて

もゆること(空穂)さの院下、九あなりまやまよとよくし(同 藏開)中、九あかりまや

かくめでさき子もたらん人をばいりゝのろそりよ給そん

あかりー(源 竹川)廿打出すこと事もて侍れあかりーこととてさつ程よ(同 行幸)

八せうくの人のえたてるまどきとのうちりかあかりーことととまりへさまに

るざりーとさきて(同 若紫)三、いといたうやつれさまへれとるさ御さまかれをあ

りーこやひとひめーもべりしよやおむしまをらん(園大曆)文和四年二月十一日

天晴今日吉田神主兼豊進狀於女中○此文の末はあなりーくと留

ああた(源 若菜)上九目のまへよみえぬあなとのことのおせつりかくこそおもひわ

たりつれ(同 蓬生)三、さるりたよかーづきたりーあかたのどーでろいひふりひなく

さびーき(同 帚木)九、かけがねをこゝろまよひきあけ給へれをああたよりのさゝ

ざりけり(同)廿、此北のさうトのあかたよ人々のけまひをるをこかたやかくいふ人

のかくれさるかたならん

あかたがと(枕)七、宮のへんよのさぶあかたがとよかしてそらごとかとも出くべ

あかとおもて(古) 雑上よみ 人しらす「ありて月のかくる、山もといあかとおもてぞこひりかりぬる

あかたふと 曲名(催馬樂) 安名尊 あかたふとけふのたふとさやいよへもいれいよへもかくやありぬんやけふのたふとさ(江談抄) 二穴貴ト云笛ハ高名笛也雖然損失也式部卿宮吹此笛之時御衣上雪降懸タリケルヲ打拂之折レ了

あなとく(貫之集)「たな、のあまのどおねのあらし磯よあなとくとかどひとりこぐ

あなづる(源蓬生)五まづいきあざりと思ひあなづりていひくるを(同夕霧)六たよ

いとあなづりよくななるさま給へれば(同少女)四十故おととおそさまさきり

ばさもふれよても人よあなづられをべらさらま(同若紫)五かの國の人よもす

こあなづられて(同帚木)四十常いとそくくくろづきかとおもひあ

あづるいよの方のおもひやられて(同夕顔)十これこそあの人のためあなづり

下の子な、らめ(同東や)十親あとき、あなづりて(同寄生)五十あなづるといあ

けれど(大鏡)序されば老たる身いとかしこきものよもべりわき人たちおぞ

あなづりそとぞ(同)七宮づりへは宿世の盡る日かりけをと生るこゝろもせで三

人ながらさふらひさまひけるほどは宮たち見奉つりつるがいくおそさませ(補

(山家)上「おもむきあなづりよき小川りな五月の雨よ水まさりつ、(好忠集)

「君こふと一のびく、身をやきて風をあなづる灰とかしてん(源玉葛)廿よりら

ぬなまものどものあなづらさうるも(同常夏)四またあなづらさうらぬ事よ

てももてかさきかん(著聞)十久清うさきとあなづりて

あなづりよく(源夕霧)七十わきをよと、もよゆるさぬもののに給ふかるまか

くあなづりよきこといできにけるをとおもひて

あなづらるもの(枕)二、人の家のまゝ面、あまり心よきと人よられたる人、と

おいたる翁、又あそく、さ女、つひちのくづき

あななさけか(源胡蝶)十我よておもひよあななさけかうらめうもと

あななひ(竹取)下まめあるをのこども廿人をりつりつりてあな、ひよあけを忍

られさり(和名)十造作具麻柱(宇治拾)十あな、ひよもひよるもとよ立まそりて

(中右記)近日待賢院修理之間構立麻柱(二代實錄)卅八天下政乎相安奈々比助奉

あかう (小町集) 「よの中いづらこがみのありてあゝあそれとやいそんあかうとやいそん(朝忠集)」「とそなわれ人ひとことを聞けりあそれとも思ふあかうともおもふ

あかうよの中 (古) 雑下 「ちりりとてそむりれかくし事いあればまづ歎りれぬあなうよの中(玉葉) 雑四 殿富 門院大輔 「春の花さきてのちりぬ秋の月とちてのけぬあなうよの中(万代) 雑二 法印 元性 「よもはがら月よむりいのかがめしておもへをりあゝあなう世の中

あかうたて (源 帚木) 卅 あなうさて此うたのたをやりからまゝととゆかゝあなうもれ (源 横笛) 十 あなうもまや今夜の月をまぬさともありたりあなおやつりか (源 花散里) 三 「不とゝぎをこととふ聲のそれかからあなおやつりかさこざれのそら

あかくちをいや (源 柏木) 九 御心のうちよあかくちをいやおもひまゝるかたかくてみ奉らまゝらべめづらしくうれしからまゝとおやせとあかぐる (榮 うちく) 二 世よの大あかぐりといひつくるもいとゆゝ (沙石集) 武士血をとめてそのあたりあかぐりもとめけり (舒明紀) 探山 (字鏡) 殿 安奈久留 (著)

聞 十二 十六 血付たる小袖ありあやしくていよくあかぐりて板敷をあけてくるよさまゝのものどもをあくして置たりけり (同) 十二 日ころ年ころからめりねてあかぐりもとめられ候

あかや (伊勢物) 六 鬼をや一口よくひてたりあかやといひけれと神あるさこぎよえさきざりけりあかまゝろう (源 葵) 十 あかこゝろうや (瀆松物) 二 いであかこゝろうよろづおもをせありける御ありさまりかとしてあなきよ (源 玉葛) 四十 ああきよと見えかから

あかめ (袖中抄) 「あきりせのふくよつけてもあかめくをのどのからトすゝきおひけりあかめで (源 早蕨) 九 あなめでこの人やとの見え給へるを

あまみよく (万) 三 「あまみよくさきうらをま酒のまぬ人をよくみれを猿よりも似るあか (拾玉) 二 「かねていりぬあかしの風をおもふより心づくいのかみぢありとい (新千) 秋下 俊成 「吹さらふあかしの風よ雲晴てあこのとわたるあり明の月 (續古)

秋上内大臣前「あなゝ吹ゆつきが峯に雲さえて檜原の上は月とさる見ゆ(後拾)「あ
かふくせとのしるあひに舟出してそやくぞ過るさやがた山を通俊

あなまゑ(うつろ 嗟峨院)十やんことかき人のまな御あかまゑよてあんめるをこい

てもおもふ人のかいたの給へと世をば左大臣仲忠のあそんどかんまつりをつべき
(同)八此國ならび大きなる國はも國母大臣ひとつこゝろよてこそ事とそりりけき

あんにとも御あかまゑよてやんことかくてものせらるめるをあひさごめてともか
くもせさせ給ふまがりよかん(同 國讓)十四只今世は右大將親子の御代あかりなん

とすめり云々内は右大將よあひ給へまかのぬいたちもちてこれをと申さば何の
うさげひらあらんわきもくちあくべくもあらば中宮のおそいまは故郷のまかあ

すゑあり例のさる筋はもあらば(同 忠こそ)六頭よりあかすゑまでとゞまあやま
きをたちきりて見給ふらん草木まできせりざり此おとゞまつりまつらん(同 初秋)

上四十年頃つらうまつりしきんつらうまつらととおもふこゝろまべりて魂をまかへ
つらうまつりしあかまゑをもてまべれば更まひき所ある手といふものかんお

ぞえぞ侍とそうま(神代紀)上是以有手端吉棄物足端凶棄物
ダナスエノヨシキヲヒモノ アナスエノアシキヲヒモノ

補あらいまみ(和泉式部集)「ちざりしをさぐふべしやいつくしきあらいみ

まいみきよまゐるとも

あらは(源 桐壺)廿きりつぎの更衣のあらまははりかくもてあされためしもゆゝ
しうとおぞしつゝみて(同 空蟬)三こたちあらまかりといふかりあぞかうあつきに

此かうしのおろされたとへば(同)四むねあらまをうぞくあるもてななり
(伊勢集)十松の末まつるたてり「あらまあるかたよしもまむあいたづの千世をま

よどのこゝろかりたり(六帖)二「わきからぬ人にや人よ玉たれのみまかやとまな
あらまなりとも(神代紀)顯露此云阿羅幡貳(源 若紫)三こゝろし僧坊ともあらま

まとおろさる(同)十こなたのあらまはまよまべらん(同 東や)廿あらまよひひな
さでかすめうれへ給ふ(師氏集)「あやめ草軒のりざりひひともなみけふよどの

やあらまあるらん
補あらしおけ(枕)廿七えせものゝ家のうしろあらまたけなどいふものゝつちもう
るまゝうかほりらぬよ

あらし(源 末つむ)七こと人のいそんやうよとがあらしを(詞花)雜上「住
吉のかみよひされる松よりも神のゑるしぞあらしを(源 あふひ)四いとゞや

んでとかくこゝろぐるしき筋にのおもひさこえ給へままざあらしれてのさざとも

のいきこえぎ(同)五物のけとでもむねくくうらぎとぞれあらはる(同)明石(同)廿
かたぐるいき入道のころをへもあらされぬべりめり(同)蓬生(同)三おぞえせ神佛の
あらされ給へるらんやうなり御ころをへま

あらし 洗 (千載) 戀二 磯ぐくれりきやれどもい草たちくる浪はあらそ
れやせん(新續古) 雜中 鹿苑院入一年へても磯うつ浪はあらされていそその苔のむ

そひまもなり(金葉) 戀下 一をるをみもおつるなとごはあらされてこひとごまも
えこそかきね(枕) 七 まことよこがるればけさういさるかほもえかあらされて

あらそいころも(源) 藤袴 五 此御あらそい衣の色なくばえこそ思ひわくまどくりけ
れとの給へま

あらそひ(空穂) 藏開 下 四 あらしひをまろびいつべくや(大和物) 三 かいせうとい
ふ人法師になりて山はむあひたはあらそひなどする人のなりりけきはおやのも

とよきぬをなんあらひはおこせさりける(同) それまあらそひかどる人なく
ていとわびしくなんある

あらそを(狹) 四 下 今のなよまか雲の上まで人まわらされまをこがまよきありさ
まをあらそいてん(同) 四 下 六 さはがなるをこがまよきをあらそいてん事もかどり

たふまさへやせりら(源) 柳 四 五 ひたおもてまのいりでりあらそい給せん(同)
若紫(同) 五 甘もてもなれたり御まよきのつまよきまおもひ給ふるさまをゆえあらそ

いはてまべら(同) 四 下 六 あらしをのかるやのさきまたつらもいとわがごまよ
のまおもま

あらちやま(六帖) 上 二 一人でうらあらしの山はかる時のあざりこちのみちやくや
いき(人丸集) 下 一 やどののあさぢいろづくあらし山まねのあわ雪さむくふるら

あらぬ(古) 夏 よみ 人 一この夏をさふるしていとぎはをれりあらぬり聲のり
もらぬ(源) 夕顔 二 四 下 六 さいまもあらぬあらぬよまかへりさるやうまをまおぞえ

給ふ(同) 若菜 下 六 院のおむするとおぞいたるに云々あらぬ人かりけり(同) 少女 五 廿
かくれあるまよき事なれとこころをやりてあらぬことたよひあされよ

あらぬさま(源) 夕顔 七 御さるがまよあらぬさまよかきりへ給ひて(同) 紅葉賀 七 廿
うらあらぬさまよめてひがめておそろいけかるけしきをまをれ

あらぬをぢ(新古) 雜 下 一 うちたえて世まを身まのかけまともあらぬをぢまもつ
慈圓

みぞかあしき

補 あらるゝ (新續古)

哀傷 尼西蓮

「別れてはかからふべくもなりりしあればあらるゝ
うさ身かりけり (風雅) 雜中 一人のいそ鳥も聲せぬ山路にもあればあらるゝ身は
こそありけき

あらと (万) 廿五

廿五

「あらをらをこむりこどりといひもりて門は出たちまでときまさ
き (同) 同 「あらをらが行きま一日より志賀のあまの大浦田沼のかなしくもあるり
(同) 同 「あらをらにめこのむさをいおもひせろと一のやとせをまでときまさぬ

あらか (古語拾遺) 瑞殿 古語 美登能美阿良可

あらがふ (源 夕霧) 廿

廿

人よいかまいひあらがひさもあらぬこといふべきまらあ
らん (つれ) 百卅 百卅 さらばあらがひ給へといわれて云興あるあらがひかりおそ
くは御前あてあらをさるべし (宇治拾) 八ノ此罪おもくいとあらがふかた候はぬ
ありと申せば (同) 九 瀧口さものたまたる脊さもあらがひをしてをか犬の子をか
してをいらせ (源 紅葉賀) 廿 廿 いたうもあらがひさこえせ (同 夕霧) 廿 廿 つひもあるべき
こといおほせをあらがせ (六帖) 五 五 「あらがへば神もよくをよそよそやよそをふ
る人のまくりらくま (和泉式部集) 「神かけて君のあらがふまきさのよるべに

さまる水といひけん (後) 戀三 戀三 滋幹 「千をやふる神ひさのけてちりひてしことゆゝし
しあらがふかゆめ (同) 戀五 戀五 消息りよそいけきともまごあそざりける男をこれらきあ
ひよけりといひささぐをあらがせざありとうらまつりそいければよみ人「そちす
葉のうへにつきをさきうらまこそものあらがひにつくといふかれ (著聞) 八よ御
あらうひの候まともいむねさぐひてや候と申さりたるよ (枕) 九 九 そらごとなどのた
まひかくるをあらがひ論しをかき聞ゆる (源 常夏) 廿 廿 とりさてよといはなれど
こと人とあらをふべくもあらぬ (同 夕霧) 四十 四十 北方の御おもひやりをあかちよも
あらがひさこえ給せ (宇治拾) 十二 十二 さとあらがひをせられけり (同) 十二 十二 東大寺
の聖寶こそ上座とあらがひして (朝光集) あらがひてりへりごとをか「あらがは
さをひてもいとといそ水ながれて今いたよこのまむ (仲文集) 「あらがへど人
よいへとやいふなどやおもひかへせどひななきものを

あらくき (六帖) 二

二

「川口の關のあら垣まもれどもいでわがねぬ忍びくよ (催
馬樂) ちそ口のせきのあらがきや云々 補 (新千) 戀三 戀三 よみ「川口の關のあらがきい
りかれはよるのよひをゆるさざるらむ

あらみ (夫) 卅四

卅四

「あら神のあらそれいそむりより神をば君とあふぎ初よき

あらりトめ(撰集抄)二このたびはあらりトめと給ふべからせとよくくおほせふくめ給へりけれ(同)一あらりトめさむることかりれとてかきけをやうようせ給ひぬ(應神紀)十預アラカ(万)四十「あらかトめ人言をけしりくしあらばおほやわがせこおくもいりよあらめ

あらた(源明石)八十三日にあらたなるるしみせん(同玉葛)七佛の御中よとつせかん云々あらたなる(狹)四五あらたなる神の御心よせよとはさざりまきかからも(山家)下「あらたなるくまのまうでのあるしをばこほりのこりようべきかりけり

あらた(荒田拾)戀三よみ「あづさ弓春のあらたをうちりへしおもひやみよし人ぞこひしき(夫)七(爲家)「おしをべてうゑぬあらたもあがりけりあめのうるひのみよのさかへ(補元眞集)「浅みさりのべのあらたを打ちへしせかりし秋をまちやくらさん(壬二)中「わりあつむあらたの面のゆふ霞さくるともとよひをりおつなり

あらたつ(源はき)八(鬼神)もあらたつまつまとき御けしひかればしとかくこし人ともえのしらす(同紅葉賀)「あらたちし波よこしろいささかねよせはん磯をいりぐらみん

○あらさて(源楨柱)六あのでろあらさてしいみどきこといできかんとおぞしづめて

あらさむ(源桐壺)一(冊)にかうあらためつくらせ給ふ(同帚木)廿あらためてのとりよおもひからばかんあひとるべきなさいひしを(同末つむ)四(冊)あらためてひきりへたらん時とぞおぞしつゞけらる(同夕霧)七十ことあらためてのちいしとたまさりまつれかくかりまさり給ひつゝ

あらたまる(狹)四十三四年もりへりぬまば大將殿の御りたまの女君の御をがたかどこそあらたまるるしとておそかやりあらね殿の御方よもとよりさふらひ人々のきぬの色さもむるのしきをたちりさねたるやうよてさまといしひすぐしつゝそての十五日よ(源末摘)五(冊)御けしきのあらたまらんかんゆりしきとの給へば

あられ(持統紀)是日漢人等奏踏歌

あらそふ(源繪合)十竹取の翁ようつづのとしりけせあせせてあらそふ(補)万

十ノ一此ゆふべ秋風ふきぬ白露よあらそふまぎのあはさるむ見ん(源葵)十(冊)ありし所の車あらそひ(同帚木)六中將まちとりておのちかしをわきまへさ

どめあらしそふ(同 葵)三いどまうらぬかざいあらしをひりかどさういくおせ
と(万)十九かをあらしそふと玉きさるいのちもすて、あらしをひ(源 梅のえ)三人の
御おやけかき御あらしをひで、ろかり(拾)春よみ人「ふく風あらしをひりねてあ
引の山のさくららへころびまけり

○あらしそせ(應神紀)みちのりりこもたをとめいあらしをいせ(古事記)中ア阿良蘇波
受

あらづくり(更科日記)丈六の佛のいまたあらづくりにおもする御顔をりり見や
られたり

あらしり(源 東や)三あやうあらしりよるかりびたるこ、ろぞつきたりける(同
帝木)四かまくの人からバこそあらしりよもひきりかぐらめ(同 玉葛)十あらしり
かるふるまひとるもゆ、くおせゆ(同 柏木)五あらしりよおどろく、くたらよ

よむを(同 竹川)九風あらしりにふきたるゆふつり拾玉七「あらしりよ心を
風のさをふりか雪まどおちぬ雲の夕暮

あらしりや荒武者宇治拾十むくつけきあらしりや
あらしり(宇治拾)三尻やねとあらしりつきて

あらしり(源 帝木)六あらしりこのいられるいをのそがた
あらしり荒野山家下「雲雀とつあらしりおふるひめゆりのなよ、つくともをかき
こ、ろりか

あらしり散神代紀散去矣ア守部云あらしりとの集會せ一人の已がむきく散行
より出たる語也ちり浮べる船をそら、とも又あらしり松原かと云が如し

あらしり金葉上雜選子内親王いつきよおそいまける時女房よもの申さんと
てあしのびてまゐりさりけるよさふらひせもいりかる人ぞかどあらしり申してとせ
そべりけきわた、うがよ書ておりせそべりける惟規

あらしり荒草万十四「くさかけのあぬかゆるむとせりいみちあぬのゆりせで
あらしりさたちぬ

あらしり源 桐壺卅おとらせもてりいづきたるいあらしりまほしき御あそひせも
かん(同 権の本)八御さまりさちせもいよ、まさりあらしりまほしくをり、きも中々心
ぐるう(同 橋姫)卅けそひありさまとささりかりらんをぞあらしりまほしきやど、
おせえそべるべきかときこえ給ふ(同 初音)四何でとよつけても末とそき御ちぎり
をあらしりくきこえりそ給ふ(榮 玉のあさり)一あとしり十五よあらしりせ給ひ

ぬらん東宮の十九をりりよやおそしますらんいとあらまほしき不どの御ありさまなり(源橋姫) 四いとあらまほしき水の音をみのひびきよ

あらまき 芭直俗ニイフ(空穂國讓) 七きのかと國のつりさたちのらうにひきゐても

のさてまつるあらまきひとつさけとをひとつよつけたり(同) 十三あらまきとと

といをとりと云々(宇治拾) 七鯛のあらまきをおろく奉りたりけるを云々やりつ

る童木のえたよあらまきふたつゆひつけてもてきたり云々(うつろ國讓) 中五左の

大殿よりいさかうとたちをあらまきをどあり(同) 上六いをあらまき人の奉ら

らんおほく有と

あらま (源橋姫) 七いとあらまき風のきはひよろろくと落みざる、木の葉の

露のちりかゝるも(同 蜻蛉) 五此いとあらまきとおもふ川はながれうせ給ひはけり

とおもふよ(同 わけまき) 五あらまき岸のこさりを(同 若紫) 卅あらまきうきお

えさわぐべきからねばうちをさきつゝゐたり(同 東や) 五十あらまき山道よと

やすくもえおもひたゞでかんと侍とときおゆ

補あらまき(拾玉) 六「世の中をいとふ心のあらまきよおあでも人にわりぬるり

あ(山家) 下「待りねてひとりいふせと忘きたへのまくらからぶるあらまきぞする

(風雅) 雜下「うき世といおもひながらよせてやらであらまきよのと過つるりか

(同) 同「をりくゝの身のあらまきもあそりけりわが心さへさどめおのよや(同)

同壽成「あらまきの心のまよとる夢をおもひあそるうつゝともが(同)

院小「あそれよもうつゝにおもふあらまきのたゞそのまよ見つる夢哉(同)

「おどろりぬきのふの夢の世をいらで又あらまきのあはもそりあ(同)

むろをよよやよの中とをりりのあらまきよてやつひよそぎかん(新後拾)

「あがらへてあるさへいとふ老らくの身のあらまきの末も頼ま(同)

らまきのりなふ世から拾りぬる身のゆく末を猶やたのまん(同)

ればわがあらまきのすゑをたよおもひさどめぬ心なるらん(同)

うきをよるゝあらまきの身のなぐさめい心なりけり(同)

りらまきり何をりは數ならぬ身のかぐさめよせん(同)

まよからで世中のけようき時のかぐさめぞまき(同)

時いあらまきよいくさびきて心あるらん(新古)

どいのかひやあきたゞあらまきの夕ぐれのをら(美濃家裏)すべてあらまきといゆ

くさきのこととせんかくせんとおもひまうくるをいへり(新後拾)

甚法師

まゝの心の内は咲初て人よいられぬ山さくららな

あらしの心(源 玉葛)初あらしの心をとおそれよくちをしく覺いづ(後拾)哀傷爲願

「世の中はあらしの心とおもふ人なきがおそくもかりよけるりか

あらしの心アラント也源源 海標八今ゆくす忍のあらしの心とおおす(同 総角)

とあらしの心かゝらんらんらばなど行末のあらしの心とよとりませて(狭)上一ゆくへ

かくきゝかゝ給ひていりさりりおせかけりんと思ひやらるゝあらしの心とよあ

ぢきかくなまごもおちぬべき(拾玉)四「何となくあらしの心とよおもひつゞけり

がてまことの道よりぬる(源 東屋)三夜ひと夜あらしの心とよおもひつゞけり

(同 橋姫)二見まさりせんこそせりりるべけきとあらしの心とよおもひつゞけたまふ

のを(同 総角)五六十たゞありらん後のあらしの心とよあけくきおもひつゞけたまふ

(榮 岑の月)廿一とてろこのふたところの御ことをあらしの心とよおもひつゞけたまふ

ひきこえ給ふ經五一「いりよせんおもひかゞさむかさもかきあらしの心とよ

も限こそあれ(同)雜中「ころをばせが心こそかゞさむれあらしの心とよ

とせせがたり(拾玉)三「見せせやを夜床よつもる塵をのゝあらしの心とよ拂ふ

けいきを

あらしの心(源 橋姫)五川風のみとあらしの木の葉のちりり音水のひびきな

ど(同 寄生)九二あらしの心あづまをどこのこゝ物おへるあまの具(同)六十

いとゞく風のみ吹さらひてころすてあらしの心なる水の音のみやどもりよ

て人りゆもことよみえ補(濱松)二「さしあらしの心かゝの上よこぎとなれ(同

東屋)五十あらしの心山みちよ

あらしの心(つれ)八十行末ひさしくあらしの心とよもころにけがら

補あらしの心(土佐日記)けふうみあらしの心をよ雪ふりかみの花さなり

あらしの心(盛衰)四十あらしの心かゝりて補(平家物)ものゝふのあら

なかきよとらされて

あらしの心(洗)拾(拾)物名「くきもそをそりあるふりせりあらしの心とよ

くみゆらん(平家物)長門本こき白山権現の云々出湯かりかたけかき處馬を

いきてあらしの心と狼藉なり(源 ゆふのほ)四川の水よて手とあらしの心(金葉)連歌鶉の

氷ようのべ「さもこそいそこのえからめよとよあらしの心と見れどくろき鳥りか

是の音便よいひ(伊勢物)廿七女の手あらしの心とよ

○補あらしの心(山家)上「五月雨よ小田の早苗やいりからんあせのうき土あらしの

こされて

○補 あらひさらー (宇治拾) 十一、こんのあらひさらーのあをき山吹のきぬの

補 あらふるいも (万) 十一、四「たぐひきのいらまなみのよりのあへせあらふる妹
よこひつゝぞをる

あらふるりも (拾) 長能 「ささへかをあらふる神もおへかべてけふのあてーのそら

へかりけり (順集) 「ねきこともきりせあらふる神たよもけふのかてーと人のちら
かん (拾玉) 二「いづくよりあらふる神のやどるらんけふそらへせぬ家なけれバ

(文選) 東都賦 陽犯 アラフル 荒備 ともいひ事詔詞解六四十三

あらこ 荒籠 (竹取) あらこよ人をのせてつりあけて (古事記) 八目荒籠

補 あらえびせ (濱松) 四、いみどりらむあらえびせもなきぬをりよ

補 あらてつりひ (月詣) 雜、云々 五月四日右近のまゆみのあらてづりひよつきて侍り
けるよ 云々。あらてつりひの事袖中抄よく

補 あらてくむ (堀後) 「あらてくむいづがかきねのほどゝぎはかけどもあれが聲の
やつせせ (夫) 卅一「あらてくむいづの松がき花さきてあかおもしろの雪のあいた

や

あらくー (源 東や) 五十 その神主いとあらくーい々あめり (同 玉高) 五 舟子どもの

あらくーき聲よて 云々 うたふと聞て (狹) 四、峯のあらーあらくーくときとふ

きたたーちりまがひさるかと 云々 (源 夕顔) 卅 風や、あらくーうふきたるそ

あらざりけり (源 藤袴) 三 こととーきさまよもてな給とざりーからひに今あ

らざりけりとてこよかくかそらんもうたてあれバ (同 若紫) 四十 いざ給へ宮の御使

よてまるりきつるぞとの給ふまあらざりけりとあきれておそろーとおもひされバ

あらざりーさま (源 檣柱) 四 年頃いさゝりとされさるふるまひあくて過給へるか

でりかくこゝろゆきてあらざりーさまよこのまーう宵ありつきのうちーのび給へ

る出いりも 云々

あらざれりー (拾玉) 四 「あらせせやとおもふ人のみうせそて、あらざれりーとお

もふ人のみ

補 あらき (万) 十一、「りつらぎのそつひこまゆとあらきよもよるとや君がそが名の

りけん

あらさかせ (源 桐壺) 十 「あらき風ふせぎーけのかれーよりこまぎりうへぞーづ
こゝろあき (拾) 雜下、東三條太政 たいのもーさかたよふさゝびおくれたるふささの草
大臣の長うたふ

をふく風のあらしかさよのあてとてせそきさもとをふせぎつ、(源野分)十あらし風をもふせがせ給ふべくやどわりく、うこ、ろをそくおがえさべるを、(忠見集)八「此をれる櫻のちらでのこれるのあらし風よもあてせやありけん

あらしやまぢ(源うけるふ)十あらし山路をゆきりへりしをべりし、あらしやまぢ(源浮舟)六いとあらし山越になんそべれどことよ布と遠くのさふらそぎあん

あらしとち(夫)廿一「いそくよの山のあらし道手向して越るけふも空ぞいぐる、あらしとさき(能因歌枕)人の中をさくる神をばあらしみさきまたあらしとさきといふあらし神あり(狭)下「もの、さまさの、奉るをめりあらしとさきといふもの、そあたぬ人のかくよるべき事のあらしうなん覺ゆる

あらし(荒源幻)九「今のとてあらしやそてんあさきのこ、ろとゞめ、春のりさねを(詞花)春、そとあらしたる家の庭に櫻の花のひまをくちりつみて侍けるを見てよめる(同)雜上良「板間より月のもるをもつるを宿のあらししてをむべりけり(万)卅五「ゆふ霧よ千鳥のあさし佐保ちをばあらしやそてむみるよしとあし(狭)四、中故郷もいとゞあらし侍りつるよさちよらせ給ひけるをかんおどろきおもう給

ふる

あらし(嵐)和名一嵐孫恂云嵐山下出風也(和名)阿。八景よ云へる晴嵐の山氣よて風よのあらし契沖云うつろた、こそ「わがやどよ時々ふきし秋風のいとゞあらしとあるがあやしきこれの六帖よ「われをきみとふや、とまつ風の今のあらしとあるぞりあしきこれをとれり千五百番歌合よ通具卿「ふく風もあらしよかれをこの山夕のうづら聲うらむかり判者定家卿よて風のあらしとあるといへるを難せられさるの六帖并今の歌を考られざりけるをるべし

あらしのよは(嵐)庭(新勅)雜一、入道前「花さをふあらしの庭のゆきならでふり行ものわが身ありけり(玉葉)春下「吹よこるあらしの庭の木の本にひとむらうろく花ぞのこれる

あらしのりせ(和泉式部集)「うきよよとあらしの風をるべにてと山風よそでのぬらいつ(拾員)上「さからでも袖やわくわく山里のあらしの風の暁のあらしあらしのそこ(續千)富門院「くれそつるあらしの底よこさふかりやとどふ山の入相のりね

あらしのつて(風雅)冬兼「吹さゆるあらしのつての二聲よ又のきこえぬありつ

きのりね

補 あらゝのまき(風雅)冬法親「かがきよの霜のまくらの夢たえて嵐の窓は氷る月
りけ

補 あらゝのまくら(新後)羈旅「ふるさとを出しよまさる涙りあ嵐のまくら夢よこ
りれて

補 あらゝのあき(新古)秋上攝政「荻の葉よふけばあらゝの秋あるをまちけるよと
のさをーりの聲

補 あらゝや(宇治拾)一この旅人をんさともわらひてあらゝやさんなめりといへを
補 あらゝめ(拾玉)二「山里の外面の小田のひとせまちあらゝめをへてさねまさよ
けり

あらぞ(枕)四其聲どもゝまきゝゝあられてそれぞりれぞといふよまさあらぞかど
いへバ(曾丹集)「冬きぬと人いへどもあさ氷むをぬほどのあらぞとぞおもふ

(古)春上「さるきぬと人いへども鶯のかりぬりぎりあらぞとぞ思ふ(六帖)六
忠岑「色も香もよほふ菊ともかりてーりわきよりのまたあらぞとおもひん(枕)九何事

ぞ生昌がいととうおちつるもと問せ給ふあらぞ車のいらざりつる事いひ侍ると

申ておりぬ云々あれいたをけそうよといへたあらぞ家あるト局あるトとさどめ申
べき事のとべるかりといへバ(同)七「そよいで左大辨よものきこえんとさふらひ

していとせればいとよくうるのーうーてきさり(源空蟬)十夜中にこまをありり
せ給ふとさりーがりてとさまへくいとよくてあらぞこゝもとへいづるぞとて云

(榮)うらくの別十 何の車を只今りゝる所よくるのとてかりえよさとつけさあら
ぞやとのゝこそたよ參らせ給へる今りへらせ給ふかりといふをきゝて

○あらぬ(良玉集)「ね山こる賤男がみよあらぬどもあらぬかけきを持どくるー
さ

補 あらぞより布りの(榮鶴の林)十布どけのさうかうよあらぞより布りのいろをこ
んどおぞしめさぞぶつほうのこゑよあらぞよりほりのよのこゑをさくんとおぞし
めさぞ

あらすか(拾玉)五 「からえぞをきれもぞゆる嶺の松たつきの音のたえまあらす
か

あらぞや(源葵)十二いであらぞや(同)寄生(四十)いとかれ顔よかりらの内よいりてそ
ひふー給へりあらぞや志のびてのよゆるべう覺はよともありけるが

曾補准言集 卷之四十四 三十三

○あらせせや(拾玉)四「あらせせやとおもふ人のとうせせて、あらせれりとおもふ人のと

あむ(浴)枕二ねおきてあふる湯のはらご、くさへこそおぞゆれ(古)別源のさね

がつくへ湯あえんとてまりりける時(万)十六狐爾安牟佐武榮本の甲十九くれたるりよよて水あみ給ひて四方の佛神と、がえてあき給ふ

あむ編書籙あむあむあむ著聞十六ノ著聞五十一著聞トバリノコト著聞めぐりとうつくくあてえぞう

あん(案)太政官式十御體卜者云々神祇副若祐持奏案進大臣源藤はるま十さりや

かく人のおし討るあんよおつることあらまゝいとい口をしくねぢけらま(榮 初花)五十まささおもとせんとたさりたることおればあんよのりられよけ

り(伊勢物)百七されとまたわりけきバ文もをさくくらぢいせんやうたのよま

ざりけりりのあるトなる人あんをりきての、せてやりけり(注)草案かり下がきを

る也(盛衰)廿古きものをうつつすがごとく案よおよいでこれを書ま

あんど(安堵)漢書(高入關吏民皆安堵如故)文選(撒蜀文、福同故人度流來裔百姓士

民安堵樂業(百鍊抄)十立兵士屋簃火云々諸人安堵之計也著聞十二昔ハ八幡のち

こよて云々叔父をころして八幡よも安堵せせ盛衰八君さちもこ、くこよにけ

あくれて安堵せせ(同)四隨分の思召案をめぐら向後の安堵を存すべ(續紀)七

造建郡家爲編戸民永保安堵

あんち(安置)つれ百六十春の日雪佛を作りて云々其かまへをまちてよく安置

してんや

あんの帝(平家物)六あんの和の帝の御ひがごとくぞ申つたへたる

あんかい(アナイノ所)へモ出ス(宇治拾)十あんかい此羊をころしを殿おそしての

後よあんかい申てゆるさんぢるぞといふ(同)十殿よりもさためて候なんと思給

て案内つりうまつるよさることもうけ給らぢ(著聞)十八中御門左府へ案内申さ

れなまバ

あんのごとく(案の)宇治拾二まちけるが案のごとく入りささる人あり(著聞)四十

或人連句のたびごとく想像花陽涸とさたまれることよひひけり或日人々よりあひ

たりけるよりの人案のごとくまたあの句をいひひりける(同)十六あんのごとく

大番のものあ男の云々

あのごとく(如案)源七けよあのごと御こ、ろよ志まよけり源ノ案ノ如ク兵部卿ノ

宮ノ心ニ玉葛ノ君ノシ

ミナル(蜻蛉日記)五下 あのことみづりらりへりてとす

○あんト 案ト(宇治拾)五 御神樂の夜ナルカ家綱うけ給そりて何事をりせまーと

あんトて云々云々あんトさる事のあるい

○あんぢる一(竹取)五云々かーこき玉の枝をつくらせ給ひてつりさも賜いんとの

給ひきこれをこのころ案ぢるは御つりひとおそーまをべきかくや姫のえうー給ふ

べきかりりりとうけさまそりて

あんーつ 庵室(いねぬー)こーりこめぐりてそれバ庵室とも二三百をりり

あの(源あのし)六十まるれりー使の云々あのをまよとまりたるをめす(同繪合)十院

の御繪のささいの宮よりつさそりてあの女御の御方はもおほくまるるべー(同空)

蟬九ごためまのことはもあらねぞあのつらき人のあがちは世をつゝむもさは

がよいとはーけきバ(同浮舟)九あのわさりはらうト給ふ所々の人を仰せよてま

るりつりうまつる(宇治拾)十七けふの内はよせてせめんこそあのやつの存外はー

てあをせてまともんぢれ(榮松のしつえ)四 かはことはも先あの御方のことをとあ

ずーおきてさせ給へり(竹取)下そのち翁おんな血の涙をかがてまとへどかひ

かーあのかき置ー文をよみてきりせけまと何せんはり命をーりらん

補 あのおと 足音(万)十四「あのおとせせゆりむくまもがかつーりのまのつぎを

ーやまぢりよむむ

あく(新千)誹諧小侍従「ーのびこしゆふくまのまのからでくやーやいつのあくは

あひけん

あぐけ(源夕霧)卅 おまののおくのをこーあがりさる所を引あが給へきバ(万代)

秋上「たをたのいはもさたて、おりあぐるとけーのあやいけふやさちぬふ(大

和物)一三日はあけせ御らんせぬ日をー

補 あくる 明年ふ詞(新古)冬慈圓「年のあけてうき世の夢のさむべくくるともけ

ふいいとさらまー(美濃家裏)夢の夜の明ればさむる物ある故に年のあけてどい

へりされと年は明といふも俗はちりー(尾張家つと)明年をあくる年といふべー

さらバ年のあけてどもをぢりいとさらんよ常はいをさくいとせども夜のあけ

て夢のさむるは對てうき世の夢のさむるは年のあくるとどういとさらん云

補 あくるまくら一(万代)秋下「さが秋の別をかれてきりふすあくるまくらよと布

さりるらん

補 あくぐれ(後拾)夏重之「夏草のむをぶさりりはかりはけり野りひー駒やあくぐれ

ぬらん(續千) 雜上能 譽法師 「あくがる、心のまゝ、またづねきて山路の末てを花よみるり

か(貫之集) 「思ひあまりこひしき時のやどりれてあくがれぬべきこゝちこそをれ

(万代)ものよ (宇治拾)十一 と一ころありける所をもそのことゝかくあくがれてより

つく所もかりりけるまゝ、(千載) 春上和 泉式部 「うめが香よおどろりれつ、春のよのや

とこそ人ハをあくがらしけれ(重之集) 春のくれつらと「花もちり鶯の音もかれゆけ

バゴがやまぎとハあくがれぬべし(馬内侍集) 「身うらこそとよもかくよもあくが

れめりよとむさまのをたえごよをな「世にもとをあくがれまたるたまかればうら

かきつまよとまるものりハ(續古) 秋上 經信母 「みる人の心ハそらにあくがれて月のか

けのみずめるやどりか(同) 鞠旅 光俊 「あそれかり何となるとのそてかれバまたあまが

れて浦つとふらん(同) 雜上貞 慶上人 「あくがれし春の心と今よりハやとよとめよと花ぞ

ささける(新後) 秋下 定家 「あくがる、心ハさてもかきものを山のそちりき月のりけり

か(玉葉) 秋下 法皇御製 「あくがる、心ハそらよさをいれてぬるよそくかき秋のよの月

(同) 秋下章 義門院 「かがめとびぬあくがれたちぬ我心秋よりかき月のよか(山家)

上「あくがる、心ハさても山ざくら散なん後や身よあくるべき(月詣) 五、定伊 法師 「あ

やめぐさおのがぬまべをあくがれて軒ののぶ宿りりてなり(千載) 春上 俊頼 「梅が

香をおのが垣ねをあくがれてまやのあまりよひまもとむかり(風雅) 秋中 隆博 「心よそ

あくがれやすくなりよけきかめうらる、月のしるべ(源 楨柱) 八この年をろ人

よも似給とせうついで、ろかきをり、おほくものし給て御中もあくがれてやど

へよけきと(亭子院歌合) 貫之(新古) 春上 貫之 「我ころ春の山べよあくがれてあがか

が一日をけふもくらいつ。あくがれの論病床漫録あり此説の非をる事梅園日記

よいへり(新拾) 秋上、二條院 参河内侍 「月を見て心のまゝあくがれバいづくり秋のすそり

からま(金葉) 秋内大臣 家越後 「よとよかくこゑよ心ぞあくがる、わが身ハ鹿のつまあ

らねども(詞花) 雜下 顯仲 「あくがる、身のそりかきハ百とせのあを過てぞおもひ

らる、(同) 俊頼 「あしびたくまやのさみりハ世の中をあくがれいづるかどであり

けり

あくがら(伊勢集) 秋のころ月と見て「月影の軒のあまりよさし入てをほあ

がこゝろあくがらしつる(榮 ゆふて) 九こかやりかる殿上人の申あくがらをあ

らんとてめしおせかどせさせ給ふ(風雅) 春中 白川院 「山ふりくさづねよいこでさく

ら花をよし心をあくがらららん(拾員) 「よしひさぬまたこのやどの梅花今あくが

らら春の明くれ(万代) 夏 道濟 「もるりなるたゞ一聲よほとゝぎは人の心ぞあくがら

すかない
いつる

補 あくたび(拾) 戀五よみ「八のりよもこれをみよまのあくた火のあくどや人のおとづきもせぬ

補 あぐら(枕) 十一御さトきのまへよあくらさてゝゐたるなど々にぞおすめでたき(源胡蝶) 八 かくやのさまよしてかりにあぐらどもめたり(瀆松) 上 水のもどかる

えゆいそぬ花のかげやそぎのうたよあくらともさてかめて
補 あくまで 万十七「三やこべまたつ日ちりづくあくまでよあひ見てゆりかこふる日おすけむ

補 あくしん(惡心) 宇治拾三 それよ此僧あくしんをおおして
補 あくび(榮若水) ちりらをつくりてかぢまるるよ御あくびをよせさせ給む

(著聞) 廿四 天井の上よあくびさしてやあらんとおすゆる聲よ(同) 廿八 只今御聲ぞうけ給てあくびてけしきかちりて見え候(源朝のほ) 五 十宮もあくび打し給ひて

補 あやよく(源桐壺) 廿 かれの人もゆるしきこえざりしよ御心ざしあやあくかりトぞりし(同) 帯木 初御心よおすしとゞむるくせなんあやよくよて。俗よ云意地わろ

き也生憎可憎等ヲ遊仙窟杜詩よアヤニクともアナニクとも訓せり若紫よあやよく

かる短夜とあるもこゝろなくいちごろき短夜といふ也(後拾) 戀二「いりよせんあ

かあやよくの春の日や夜そのけしきのかゝらましり(金葉) 戀上「あやよくよこがるゝむねもあるものをいりよかこりぬたもとなるらん(枕) 三 八 あやよくどちて物

なぞとりちらしてそこなふを(空穂) 樓の上 上 廿四 上 さもあやよくさめを見るりなどをりしき聲してよみかけておそしぬ

補 あやりる(拾) 雜戀よみ「風もやみとねのくぎ葉のともすきばあやりりやをき人の心り

補 あやづる(三部抄) 其つぎめくゝをくさりあやづりて
補 あやか(躬恒集) 上 四(拾) 秋 彦星の妻まつ宵の秋風よわきさへあやか人ぞ戀しき

家持集五 廿 ちらま弓いつもの山のときもなる命のあやなこひつゝあらん(兼輔集) 九 「こぬ人をまつあき風のねさめてのこきさへあやか旅をちする(後) 春上よみ

「心もてをるりのあやか梅花りをとめてたよとふ人のあき(万代) 春下山「めづらしき物りのあやか山ざくら心の花よありぢもあるり(玉葉) 春下山階入「春霞

あやかゝたちを雲のゐるとはやまさくらよそよても見む(詞花) 春 道前左大臣「こまさりあこがまちえさる鶯のまつねをあやな人やきくらん 道命「こまさりあ

あやかりる(兼輔集)「磯千鳥あやかりるねの行す忍のかりすのそまのなりせもあらかん

あやなく(貫之集)「うつろそぬまつの名どてよあやかくもやどれる藤のさきてちるりか(同)「女郎花よを袖ようついでいあやかくわきを人やどがめん(信明集)「そむ鹿のなりぬときさへあやかくもこゑさりささときわたるりな(拾)春能

「身よりへてあやかく花をいむりあけらば後のさるもこそあれ(後)戀二よみ人しらす

「とりもあへせ立ささぐれいあど浪よあやかく何よそでのぬれけむ(業平集)「伊勢物」見せもあらせ見もせぬ人の戀くくばあやかくけふあかめくらさん(躬恒集)卅「菊の花とつゝあやなく猶もあらで人の心ようつろふあゆめ

あやかき(重之集)「むら雨よぬるゝ衣のあやかきよなほみのトまの名をやからま

あやかき(公忠集)連歌女房 ほともなくぬぎかへてけりふぢころもといふをさゝて「あやかきもの世よこそありけき(源藤はるま)八かゝることの心ぐるしきを見せぐさ

であやかき人のうらみおふりへりていかるゝしきわざかりけり(同)末摘十一鐘つさてとぢめんこといさげがよてこたへまうきぞりつゝいあやかき(補)同竹川卅三や

このあやかきを月よ今少し心ことかりとささめ聞えいかどすうして

あやかき(兼盛集)廿祭のつりひのさつとところつりひまひひとべいトうあとよ中將かそらけとりてものかづく「酔よけるわきらいーらあやまな一たがかげさる

つとよりあるらん(後)戀二よみ人しらす「おもへどもあやな一とのみいさるればよるのよ

しきのこゝちこそそれ(補)古(春上)躬恒「春のよのやみのあやかきうめの花色こそ見えぬりやのくるゝ(月清)二「夏のよもやみのあやかき橘をかがめぬ空よ風りをる

あり(家經朝臣集)「あやな一やあさちがうへのこと葉よふあでする身のこゝろとむる

あやむ(堀初)橋隆源「軒ちりきそなたちさかのうつり香よつゝまぬ袖も人ぞあやむる(散木)「戀はとも身のけしきたよをそらせバいそぬよひとのあやめま一や(補)

山家下「おやつりあいらよも人のくれさどりあやむるまでよぬるゝ袖りな(同)

「あやめつゝ人しるとてもいりせせん一のびまつべき袂ならねバ〇此歌の御裳濯川歌合の中よありて判云志のびまつべきをといへる末の句いどをりしとトめの五文字やいらよぞ聞ゆらんと見えさり(拾玉)六「あらぬ色よ我くろりこの成ゆくを涙ならねバ人ぞあやめぬ(隆信集)「こひいなバそれゆゑ人やあやむるとおもふ

よをいさいのちかりけり(同)「うつゝよもさらばいりよぞとがこひをあやむる人の夢よ見えつる(千載)八戀三よみ「おきてゆく泪のりゝる草まくら露しけしとや人のあやめん(狹)上四これのあやめ給ふべきよもあらせ(頼政集)「戀をるり何ぞと人やあやむらん山をどゝぎす今朝のまつ身を(山家)下「けしきをばあやめて人のどがむとも打まりせていれとどぞおもふ(濱松)下四おぞしあやめて人つけ給へりけるをめり〇著聞集よ出せる今様よ心のうちけり志のべさも色よいでけりわが戀のものやおもふと見る人のあやめていりよとどふまぞよ北邊隨筆四ノ十説あり

補 あやむるがさ(宇治拾)六ノ十三

ひけぐるさがあやむる笠きてふくろかるやかぐひ皮まきたる弓もちて

あやまち あやまちハヌテコ知タルヲチエセザリシヲ云ヒ 源 柳七 布のと奉りたまへる月けの御りさち猶とまれる匂ひかどわりき人々のあやまちもいつべくめで

きこゆ(同 帚木)十 我こゝろあやまちかくて見せぐさ(狹)三中わがあやまちも

おぞされ(同)七中少將の命婦かゝる事をさくよあやまちのかけきとそりかき御

文のつたへもされが一年へぬき(源 竹川)九廿の少將の君もいもまめやりよいり

よせまゝとあやまちもいつべくおづめん方なくかんおぞえける(狹)四下わがあや

まちのいとろいさも例の罪さり所かくかたさへおちて(源 夕顔)九こゝろぐる

きあやまちよてもやとぬべきかり(同 紅葉賀)十 あやまちりつるほどのあやまちを

まさし人のおもひとがめゝや(古)上雜母あやまちありとて齋院をりへられんとし

るぞ云々(源 桐壺)七 故大納言のゆひでんあやまたせ宮仕へのはいふりくものい

りよよろこびのひあるさまおとあそおもひおたりつ(同 須磨)四十志のび

とかどの御めをさへあやまち給ひてかくさおがれ給ふかる人云々(枕)十一 御さ

トきよ女房の中よいを奉る何事のあやまりよりなきのゝり給ふさへいととえさ

え(兼輔集)「りせからぬ身のをきりらのあやまちよかしてさよこそ人をうら

えめ(拾) 戀よみ「あやまちのあるりあきりをしらぬ身のいとふよゝたるこゝち

おそそれ(源 夕霧)卅 己が御あやまちからぬよ(宇治拾)廿三 心もいらざらん人よと

りかゝりて汝あやまちをかとありしこそ(源 夢の浮橋)十もとの御ちぎりあやまち

給とで

補 あやまつ

源 少女廿 限あきとりの御いつき娘よもおのづらあやまつとめ

いむり物語よあめれ(兼盛集)「おそくや人の心もいのるらん己がおもふ

あやまり(源若菜)上九いよへの世のたひよもさこそうとべよのむぐとむ
あきせらうくトきとさりあらんものこきやうかれと猶あやまりてもわがため
おたのまゝろめがとららん人をさもおもひよらせうらかりらんためひきりへ
あそれにいりでかゝるまいつみえがまゝきよもおもひ直ることもあるべ(同)
上まことまかこさりたのさえこゝろもちるかどのこれをもさしおどるまどく
あやまりてもおやすたまさりるおぞえいとことかめりかどめさせ給ふ(宇治
拾八さらんひとよなんぞうおり候とんせむぞとおもひており候いざりつるに候
あやまりてさも候とべうちよせて一ことまうさをやとおもひ候ひつれども(同)
九ノあなまゝろうやあやまりて人のみ奉らせ給ふ御さまかともこゝろくもへ
れを奉らんとおもおもひ給ふる(同)廿二わきのまぬとも經をまゝし程もぬら
し奉らトとおもひてさしけ奉りしよかひなまゆくもあらせあやまりてかろくてり
ひかもながくなるやうにてたりくさゝたられ候ひつむ(狹)春宮いりまやせりら
せおぞらんあさましきことかりやあやまりてもゆづり奉らんおをほいよてまべ
るべけき

補 あやまさせたまぬ(榮若枝)十中ぐうおは宮かどの申おらせていふトきをり

ふいにもと六とさため申るをあやまたせ給ぬよ此とやこそことやぶりよお
とませ

補 あやまらせ(空穂 樓の上)上七いさゝりあやまらせ

あやぶむみくけ一(頼政集)上「かけわたせきをぢの橋のたえまよりあやぶみ

かぐら花ををるりか(源浮舟)廿一宇治橋のかがさちぎりのくちせトをあやぶむの

まよあゝろさわぐか(つれ)百七十身をあやぶめてくさけやまきこと珠をま

らむるよ似たり(源野分)五丑寅のうたよりふきまをま云々馬場のおと南の

つり殿かどのあやぶむよかとて(同 玉高)八尼よかりなんとまといませたりけき

ばいよくあやぶみかりておして此國よこえきぬ(同 夕霧)十りゝるかたよたのまき

こえての見おどりや給さんとおもふもあやぶくか(同 末つむ)十ままよさての

まぐー給ひてんやとなまねたうあやぶりなり(同)廿六さもやまをつりんあやぶ

くおもひ給へり(同 桐壺)廿又世のうけひくまどき事かれバ中々あやぶくおぞし

まかりていろにも出させ給をせかりぬるを(同 空蟬)十あほかゝるありきかろか

ろしくあやぶりなりといよく思しこりぬべ補(源あつま屋)五こゝままたの

くあされてあやぶみある所をめり(三部抄)あやぶまどくりぬべけれども(宇治拾)

七ノまたありつる男もぞくるかぞあやふくおやえければ(月詣)千載(釋教法)「く
ちもて、あやふく見えしをまた、のいさ、の橋も今こたすかり(續古)道慶(一)くも
かゝる岩のかけもちふみ見てもあやふきものこのをかりけり(新續古)離別、安嘉
「あすいらぬ身をたのむこそあやふけれをさしとおもふこりれなれども(門院四條)

あやめ(源夕顔)四物のあやめ見給へこくべきひともたべらぬわたりかれど(新古)

維上、三條院(梅)りえよせりたがへさる郭公こゑのあやめもたれりこくべき(兼盛集)「時鳥
女藏人左近

集)「櫻ちる春の末よのなりよけりあやめもいらぬかめせまよ(能宣集)「時鳥
ねざめよ聲をさしよりあやめもいらぬものをこそおもへ(兼盛集)「奥山のゆづ

る葉いりでをりつらんあやめもいらぬ雪のふれるよ(忠見集)四 五月五日さうぶと

よもぎ家あり「よまよのそかくやど、ぎすおやつりかあやめみるべきけさひい

づちぞ(古)戀一よみ「ほど、ぎはあくやさ月のあやめ草あやめも忘れぬこひもす

るうな(拾)哀傷、栗田(ふ)くたりといひをべけるこのやり水よさうぶをうゑおきてか

くなり侍よける後の年おひいで、侍けるを見て「忍べとやあやめもいらぬ心よも

かが、らぬ世をうさようゑけん(源)帯木(二)五月五日の節會よいそぎまゐるあしこ

何のあやめもおもひづめられぬよ

あやめがのき(壬二)中「りをりあふ庭のあふちの花ちりてあやめが軒やすぐるの
ふりせ

あやめのまくら(菅)菅(夫)七(信實)「床のうへよあやめの枕りたきてねをくせねをや

よそのととりき(新後撰)夏(夫)七(俊成)「橘よあやめの枕りをるよぞむりしを忘のぶ

りぎりかりける(東鑑)暦仁元年五月四日及晚自將軍家被調進菅蒲枕(鏤)金 井御扇等

於公家(月詣)五(祐盛)「妹がすむ都かりせばあやめ草まくらふたつゆをまよも

のを○瀆臣云あやめのまくらとよめる歌爲忠朝臣俊成卿をどの歌よ見えたり

菅あやめのこ(菅)菅(散木)「いその上よおふるみぬまの菅蒲草つめるみこしや万

代のさめ顯昭注云石上菅蒲をいその上よ生どのよめり五月五日禁中よ菅蒲の輿と

て輿よ菅蒲をつみてもて参る也

あやし(源)桐壺(廿)一相人おどろきてあまた、びかたふきあやしふくらのおやとかり

て云々(同)帯木(廿)こよひ人まつらん宿かんあやしくこ、ろぐるしき(同)あつまや

三事このといたるやどよりのあやしうあら、りなるなりびたるこ、ろぞつきたり

ける(同)十かどあやしくあふあく人のおもさんどころも忘れぬ人にて(同)夕(は)

四十 あやしうみとりりける御契よひりされて(同)四あやしう夜ふりき御ありき

を(同 帚木)八 あやしく心とまるわざあべき(同 葵)廿一 いとあやしくおやうめぐらす
 一とゞののみやをさおろかりたり(万)廿一 「時もりのうちあをつゞをかぞふまは
 時にのかりぬあそぬもあやう(源 桐壺)五 うち橋をたこのこゝろこの道はあやう
 さわざを忘つゝ御おくりむらへの人のさぬのをそたへがさうまさかきことゞもあ
 り(同)八 うへも御涙のひまなくなれおとしまををあやうとみ奉り給へるを(同)
 廿一 御うさちありさまあやうさまでぞおやえ給へる(同 夕顔)卅 人々あやうがり
 て御うゆなどそゝのうー聞ゆれど(古)戀一、よみ「いつとても戀うらむあらね
 ども秋のゆふべのあやうりけり(源 夕顔)三 花の名の人のめきてううあやう垣ね
 まかんさきさべりけると申(同 末摘)七 あやう馬あり衣をがたのあいがうろよ
 てきけま(同 あらし)六 あやうさまあまともかどの高き人おとせる所とてあつまり
 まりて(同 玉葛)六 あやうき所はおひ出たまふもりとどけあくおもひきこゆれど
 (同)四 あやうき身にそへ奉りてとるりたるほどにおとせん事のかあうき事をを
 父君はほのめりさんとおもひけまど(風俗歌)いせ人のあやうきものをやかてへ
 ばをふねよのりてかこのうへをこく(源 帚木)四 十みづらもあやうきまでかんか
 どまめどちてよろづにのさまへど(同 みとつくし)十 あやうき道は出たちて夢のこ

あやうつるなけきもさめまけり(古)戀一 「さよりまあらぬおもひのあやうき
 こゝろを人よつくるかりけり(伊勢物)八 十 ちのくまゝいきたりけるよあやうく
 おもしろきところゝおやうり(万)廿二 「そこのえのまきつの浦の名のりその
 名のりてしをあまかくもあやう(兼輔集)「あふ事をいつりとのみおもひつゝ
 くらん心にあやうりけり(万代)戀五 齋宮女御 「おもへどもおやうき逢こと
 なりり昔をよかきけん(金葉)戀下 「あやうきもうれりけりおとむる其
 ことの葉よりゝるとおもへま

補 あやうく(狹)上 四 うらめしけよおやうてのたまふをあやうくときゝさまひ
 て

あやす(空穂 梅の花笠)六 ちりおつる花びらよつまもとより血をさあやうてかき
 つゝ(宇治拾)卅八 血をあやうてそとまよよくぬりつけて **補** 空穂(俊蔭)十六 おのぐ
 たぶさのちをさあやうて琴の名をかきつく

あやまぎ(新古)神祇よみ 八 千早振かひの宮のあや杉の神のまそぎまたてるかり
 けり○あや杉のちひさき杉といふこゝろかり又うつくしき葉のまをひてもくなど
 數のある木かり(拾)神樂 子生せてまべりけるよ 元輔 「おひー夕を平野の原のあや

杉よこき紫よ立かさぬべく

あま 海士(千載) 戀二「あふざる、いせをのあまやわきからんさらばとるめをゐるよしもがが 實國」

○**あまのこ** 海士(源夕顔) 廿あまのあをきばとてさすがようちとけぬさまいとあひ
ざれたり(新古) 雜下よみ「白波のよれる渚よとをつくすあまの子かれバやともさ
ごめせ 人しらす」

あまとぶ 玉葉 秋下、光明臺寺入「そまのうらやあまとぶ雲の跡られて波よりい
づる秋の月け(新千) 戀一「行けりあまとぶ雲のたよりよも我おもふ人の
ことそのよとせ 法皇御製」

あまぢ 天路(万) 四十「ぬさおきてわれこのひのむあさむりきたゞよるゆきてあ
まぢいらしめ(同) 十「ゆふづゝもかよふ天道といつまでりあふぎてまたむ月人
をとこ」

あまり 源 橋姫 十その人もかこよてうせもべりよ後十とせあまりよかん(宇
津保 國讓) 下ノ 殿君達よりそとめて十所あまり一所(源 紅葉賀) 初 朱雀院の行幸の
神無月十日あまりかり(土佐日記) それのどしとせむの十日あまりひとひの戌の時

(同) 下 けふ舟よのり一日よりのぞふれば三十日あまりこゝぬりよかりぬ(古事記)

下 加良怒哀志本爾夜岐斯賀阿麻理琴 ことよつくりあきひくや(催馬樂) 刺櫛さーぐー

へどうまりかゝつありーりと(源 若紫) 五十いとさーをぐーさる心をせのあまり
ゐてそふらりーつるあめりとかくーかへり給ひぬ(古) 序よろづのまつりごとと
きこしめすいとまもろーの事をもて給えぬあまりよ(源 桐壺) 四わりかくまつ

とさせ給ふあまりよ(土佐日記) 京のちりづくよろこびのあまりよあるわらそのよ
める(狭) 三上 目もあやよめでたき御うたちを打まもりつゝけよこの五濁あく世よ
いあまりせ給ひよけりいりよしてかりよもやせらせ給ひけんと(同) 上九 十よ四五

あまらせ給へる(源 若菜) 九 廿ぐうちよハ納言よもかりよさくーひとつあまりてや
宰相よて大將り給へりけん(同 紅葉賀) 十 十よあまりぬる人ひひゝなあそびひい
ととべるものど(同 手習) 七 六そちよあまるとしめづらりかるものを見給へつると

のたまふ(古) 序 在原の業平のそのこゝろあまりて詞たらせ(伊勢物) 八 十るかり人
のうさよていあまれりやさきりや(源 夕顔) 卅 一あさまーといふよもあまりてかんなあ
る(同 楨柱) 卅 この御局のあたりおもひやられ給へばねんよあまりてきこえ給へり

(續古) 哀 八十一よおほくあまりて猶もながらへてとべることをおもひてよとせべり

ける信實(源すま)四十二月廿日あまりいよ一年京をわかれ一時心ぐるかり人々の御ありさまおどいとこひく(万代)(新後拾)三「みよりか廿日あまりの月さにも今まで人よまされやのぼる(源花の宴)初きさらぎのまつりあまり南殿の櫻の宴せさせ給ふ(宇治拾)十六年四十あまりをりある男の(千載)釋教「まちいで、いりようれとおもふらんまつりあまりのやまのその月(建保百首)家隆卿「長月の十日あまりのみりの原川浪いろくをめる月哉(續千)哀傷行胤「三十日あまりけふとふ法のことの葉にけるや泪の露りゝるとは(後拾)云々九月の十日あまりは曉ちりくあるまで(源末摘)四十八月廿日よひ過るまでまたる、月の心もとさきよりの光さりりさやけく(同花の宴)一やよひの廿余日右の大殿のゆみのけちよ

あまり(源帝木)十あまりむけは打ゆるべとをちさるも(同)七あまりいとゆるいかくうたがひ侍もうるさく(同夕顔)五十あまりものいひさかきつとさりさころかく(同桐壺)五まうのやり給ふよあまりうちさるをりく(同帝木)十あまりのゆゑよころをへうちをへたらんをばよろこびよおもひ(同橋姫)卅。殿人が薫ノ衣いとむくつけきまで人のおどろくにはひをうかひてさやとおもへどキタル所。

ところせき人の御うつりがてえもそぎそてぬぞあまりあるや(同夕顔)一女のいとものをあまりあるまでおやしおめたる御ころさまよて(枕)九ノをのこのめあまりをそきハ女めきたり又かあまりのやうからんハおそろ(同)五あるかぎりむれさちてことよも似おあまりこそうるさやあめれ(同)四十きのふのゆふぐれまぞそべりしをいとかしことなんおもひ給ふるけふまでハあまりの事よかん(千載)雜上「そとびて身をあくすべき山里よあまりくまおき夜その月りな(枕)七五、左のびてひきよはきとこりかく心ことなればあまりよかりて人もさハよりなりとえドてかひくゞみてふしぬるのち(山家)(玉葉)春上「山寒と花咲べくもあかりけりあまりかねても尋ねきよけり(續拾)雜秋「おもふことまちよわりゆく七十のあまりよかれバいとぬつらさを(玉葉)冬為世「おたをれの竹の音さへさえてぬあまりよつもる雪の日りむ(新拾)春下冷泉前「山高とさこそあらハいさをふともあまりりなるまでちるさくららち(万代)戀五「色りさるをの、草葉よおくつゆのあまりさびしきゆふぐれのそら(新古)雜上「五月雨ハまやの軒端のあまそ、ぎあまりかるまでぬる、袖りか

あまりこと(源植柱)四いりよめいぞくあらまよとあまりことをぞ思ての給ふ

あまをとめ 天女、風雅 雑中よみ「風をいさよせくる波いさりするあまをとめ子ぐものそそぬきぬ

あまがと 雨皮 (助無智秘抄) 雨儀ノ行幸ノ時御輿ニアマガハスルニハ鳳輦ヲバオホヒカクサズ雨皮ヲホコロボシテイダシタルナリ

あまがとはりたるくるま 雨草張 (蜻蛉日記) 下やがてそこもとよあまりとはりたる車さーよせ

あまがつ (和泉式部集) 下あきことおひてかけくときゝてわきをあまがつよせよといひさるよ「あまがつよつくともつきどうきこといふなとの風よふきもそらそん

あまがつ 古本 (齋宮女御集) 後の宮よりあまがつをこきをりよ見給へとて奉れ給ひけるを返

あまがつ 源 薄雲 八めのと少將とてあてやりある人むりり御さうーあまがつやうのものと

あまがくれ (拾玉) 七「晴ぬるりもりの下枝のあまがくれまどひぬ露よ蟬のさく

かり

あまがけり (空穂 俊蔭) 一三。後蔭死 わがまぐせのがれさりけるぞあまがけりても

あまがけり 廿云々 となくくかくを給ひよあが君今日の御文を見せ奉らせかりにかくぞ

あまがけり 源 薄標 卅「ふりみどきひまなき空よあき人のあまがけらん宿ぞりなき (源

あまがけり わろき 下七。物ノケ 中宮の御事よてもいとうれしくかたけなとかんあまがけ

あまがけり あまらせ (源 藤の末葉) 四こゝろあまがけ風よみあちりふにきやひりへ

あまがけり 枕 九三月をりりの夕ぐれよゆるく吹たるあまらせいとあそれかり

あまがけり あまよ 雨夜 (詞花) 戀上「りけえぬ君の雨夜の月なれや出ても人よらきざりけ

あまがけり あまた 數多 (源 夕顔) 五とてくむ人あまたあるやうかりーくど (同 帚木) 九人のあり

さまをあまた見あせせんこのとからねど(万)二ノ月日のあまたとなりぬ(允恭紀)八「さゝらげとよしきの紐を解さけて阿麻哆絆泥受迹たゞ一夜のと(源桐壺)五あまたの御かさとをすぐさせ給ひつゝひまあき御まへとたり(同)初女御更衣あまたさふらひ給ひたる中(万)十二「草枕たびゆく君を人目おそと袖ふらぎして安萬田くやしも(同)九ノ「かきそをす人の横をどしけきかもあまぬ日あまた月のへぬらん(元真集)「めよつくのすくかりけり女郎花あまたおそるさぎ野なれども

あまたところ(源紅葉賀)三十參座よとてあまた所もありき給そぎ

あまたど(狭)四下あまた年も過しけれをりけかる御子ともおほりるあ

りよ(源葵)六十「あまたどしけふあらとめいろ衣きていそとどふるこちす

る(同 総角)初あまたどし耳かれ給ひよ川風よ

あまたり(宇治拾)一ノあまたりよおそしませといひてりきいさきて雨のりよついでゆとおもひよ

あまたりへり(源 総角)五十御文のあくる日とよあまたかへり奉らせ給ふ

あまたび(貫之集)六人よ文やりける女のいりありけんあまたびかへりて

ともせざりけれバ(中務集)「時のまもあまたびのみかなし君が行べき道よ

ぞありける(後)一雜まろうとあるトあまたびの後あひのりて(古)一よをさ

むみおくもつ霜とそらひつゝ草の枕よあまたびねぬ(源桐壺)廿一相人おどろきて

あまたびかたぶさあやふ國のおやとかりて(同 若紫)初わらそやみよ云々あま

さびおこり給ひけれバ(同 松風)廿一おほとさあまたびねんかかれて

あまたくたり(源 寄生)五十女のさうぞくともあまたくたりよ

あまそぎ(源 薄雲)三尼そぎのそと(夫)廿六よみ「あまそぎよ雪ふりつめる舟と見

てわたりがたさいいそせなりけり(喜撰式)云若詠高峯時あまそぎと云(源葵)一わ

らその姿をものをりけかるを御覽せいとらうたけかる髪をものすそをやりよ

そぎとたしてうきもんのうへのむりまよかゝれるとどけさやりよ見ゆ(同 薄雲)七

此春よりおふけ御ぐり尼そぎのそとよてゆらくとめでたく云々

あまよそぎたる(枕)八うつくしき物、あまよそぎたる見の目よ髪のおそひたる

をかきやらで

あまそ(催馬樂)東や「東屋のまやのあまりの雨をぎ我たちぬれぬその戸

ひらりせ(万代)戀三「かりそめよむをぶさやの雨をぎ一夜のそともゆるをみ

ざりか(同)「そるくれバのきのりやまのあまを、ぎことづけてのとぬる、そでり
あ(新古)雜上俊成「五月雨のまやの軒端の雨を、ぎあまりなるまでぬる、袖りか(新
後拾)戀二大「あるらめやまやの布の、く、あくるまであまを、ぎして立ぬれ、との
(源蓬生)廿 あまを、ぎも猶秋の時雨めきてうちを、夕バ(同紅葉賀)廿「立ぬる、
人、もあらト東や、うたてもか、る雨を、ぎりな

あまつをとめ 天つ(夫)十八、六條 院大進 「くもりかき豊のありりよとつるりかあまつをと
めの舞のそがたど

あまつそら 天つ(古)戀一、よみ 空 人しらす 「夕ぐれ、の雲のむさてよものぞおもふあまつ空ある
人をこふとて(源薄雲)十 あまつ空よも例よとがへるを月日星のひりり云(伊勢物)

五十「行やらぬ夢ちをたのむ袂、のあまつ空ある露やおくらん(續千) 羈旅「天
津空おそト雲るよをむ月のかとり旅ね、さび、りるらん 宗秀

あまつそで 天つ(源少女)十、四 「をとめ子も神さびぬら、天つそでふるさ世のともよ
そひへぬれば

あまづ、み(新六)五 知家 「あへるさをあまづ、みしてまであま、ぬれか、袖を人や
あやめん(万)十一 「笠か、と人よ、いひて雨づ、ととまり、君が姿、おも、ゆ

(万)十八 「久りこの雨もふらぬ、雨乍見君に、さひて此日くらさむ(散木)「かり
かねもそね、るらんまを、おふるいなさをえよあまづ、みとせよ

あまつら(枕)十一、三 「あてあるもの、けづりひのあまづらよ、いりてあ、さかなまり
よ入りたる(著聞)十八、二月の事をりけるよ雪よあまづらをかきて二品よを、め

られけり(空穂 藏開)上、十二、一斗さりのりねのかめふとつよひとつよ、あまづら
いれてき、みたるを、さ、お、ひて

あまつさへ(剩)朗詠 閏三 今年閏在春三月剩見金陵一月花

あまつみづ(万)十八、廿二 あまつみづあふぎてまつに

あまつとこと(万代)春下 西行 「岩戸あけ、天つみこと、そのりみにさくらをたれり
うゑと、め、け、む

あまつひつぎ(神武紀)廿 恢弘大業(日本紀竟宴歌)「あ、あ、びのあみのきさ、もと
り、ら、あ、あ、つ、ひ、つ、ぎ、の、む、と、め、と、お、も、へ、バ(新勅)序 秋つ、ま、又、さら、は、賑、ひ、あ、ま、つ

あまねき(古)序 あまねき御うつく、そのあみや、まの外までか、ぐれ(空穂 嵯峨院)
六 何らあまねく人よ、あらぬ、さ、さ、よ、云々(續紀)廿二、遍 麻年 發覺奴(源葵)十五、世中あ

まねくをしみ聞ゆるを(同)五御もぎの事人はあまねくののさまいせねと(續千)

春上鳥羽院「ふる雨のあまねくうるふ春をれば花さけぬ日あらどぞ思ふ(同)神祇

「二笠山むるのめぐみのあまねくは藤の末葉もあやさうえむ(風雅)釋教法成寺

太政大臣「法の雨のあまねくそく物おれとうるふ草木のおのがーかト(金葉)雜上俊賴

「日のひりりあまねき空のけしきよも我身ひとつの雲がくれつ(續古)雜上基良「春

雨のあまねきみよのめぐみとのこのむものりらぬる、袖りか(拾玉)二「秋の月あ

まねき影をあがめてぞ千一まのえどもあそれるらん(宇治拾)二あまねくつけま

むして家を行て(玉葉)雜一俊成「草も木もあまねくめぐむ春雨は袖ぬれてぞりひか

りりける

あまをふ(四季物語)十一まいて後の世の有がたきすくせたれり此たのしみをあま

あまんや

あまのいそりと(小侍從集)「よもすがらたくひなよおそろきてあけぬと見

ゆる天のいそりと

あまのいそふね(新千)秋上顯輔「七夕のあまの岩舟こよひこそ秋風ふきてまほよあ

ふらめ

あまのこそで天の(源少女)四十「日々夕よもあるりりけめやをとめ子があまのそ

そでよりけしこゝろ

あまのこそろも天の(江次第)十五新嘗祭條縫司供天羽衣(新古)春下崇徳院「山高と

とねのさくらのちるときのあまのこそろもあづるとぞみる(千載)雜中季經「うれし

さをよその袖までつゝむらなとちりへりぬるあまのこそろも(後拾)神祇能因「うとむ

まよあまの羽衣むりきしてふりけん袖やけふのそふりこ

あまのはいぶね(玉葉)戀一清「たよりある風もやふくとまちまよよせて久し

きあまのそいぶね

あまのと天の(詞花)夏頼家「よもそがらたくひかあまの戸をあけて後こそお

とせざりけれ(同)雜上忠盛「ゆく人もあまのととさるこちして雲のかみちし月を見

るりか(新古)夏通光「清見が九月のつれあき天のとをまたでもしらむ波の上りか

あまのとがと(小町集)「ちとやぶる神もみまさば立ささぎあまのとがはのひぐ

ちあけたまへ

あまのともいび(續古)戀一後鳥羽院「よとよよくゆるもくるし名よたてるあそで

の浦のあまのともい火

あまのりるも(古)戀下よみ人しらす「いく世もあらど我身をぞもりくあまのりるもよ
おもひとたる(壬二)下「いりよせんふまるもいらぬ波の上もあまのりるもよか
ほとどれつ(新續古)旅仲綱「筈やうたうたれありすおよひりあまのりるもを
ひしきものよて(月清)下「松島や秋風さむき磯ねりあまのりるもをひしきもの
よて(千五百番)定家「そていさあまのりるもをやどりよて枕さどむるよひく
ぞかき(千載)戀三俊忠「こがこひあまのりるもよみどれつ、かわく時なき浪の
たぐさ

あまのなまそぎ(古)雜下「おもひきやひなのわりれよおとろへてあまのかそそぎ
いさりせんどの(袖中抄)アマノ繩手グルト云詞ナリタグ繩トイフモタグル繩ト云
ナリ

あまのまてり(夫)卅五和泉式部「いせの海あまのあまたのまてりたよせりやどるら
ん波の花か(同)同内親王「まてかよあまのりきつむもほぐさ煙いりまたち
ぬとやさく(同)同家隆「伊勢の海あまのまてりたまておとらよ波のひま
あくとも(同)同為家「とへりああまのまてりたさのまやまつ命のかがらへも
せん(同)同内大臣「いせのうとあまのまてりたかきつめていくたびおあともほた

るらん(和泉式部集)下「よさの海あまのあまたのまてりたよをりやとりけん波の
そかみ(後)戀五無英明「いせの海あまのまてりたよとまかえながらへよける身をぞ
うらむる(袖中抄)あまのまてといふ貝つものどるまどかり云々(奥義抄)ニハあま
のまくかたトアリテあまの塩やくどていおひのりたのまをとりてすゝぎあ
つめてそのしるをやくかりさてそのまをどばもどのかたよまれくするをあま
のまくあさといふかりトアリ

あまのさりて(古事記)上四天逆手を青ふ垣打かしてかくれ給ふ(拾愚)上「お
のれのとあまのさりてをうつたへにふりくこのまあとどよもな(六百番)兼家
「我戀あまのさりてを打ちへいおもひときてや世をもうらみん(新勅)戀五朝臣
りよせんあまのさりてを打ちへいうらもても猶ありせもあるりか(伊勢物)九十か
の男あまのさりてをうちてなんのろひをるる

あまのゆきがた(拾)雜戀貫之「玉藻かるあまのゆきがささすさぞのかかくや人をう
らよとたらん

あまのいぐれ(万)卅久方の天のいぐれのかがらふとれバ
あまのせき(万代)冬好忠「いと山よ明がたき冬のよのあまの關守たれりす忍

けん

補あまぐり(枕)五 大饗のあまぐりのつりひかどよまわりとるぞ

あまくどり(玉葉) 戀二和 泉式部 「つれと」と空ぞみらるゝおもふ人あまくどりこん物を

らかくに(榮) 初花 四十 とゞりらるりもい天人の天くたりとるのとみえさり(源

手習) 七 いととき天人のあまくどれるをみとらんやうよおもふも(枕) 五 いづおあり

あまくどり人からんとおそおゆれ(神代紀) 上二神於是降居彼島

あまぐも(後) 戀四よみ 八しらす 「あまぐものもるゝ夜もかくふるもの袖のみぬるゝ涙な

りけり(古) 戀五あり つねり女 「あま雲のよそよも人のなり行きさすが目よみゆるもの

ら(補) 万 十一 「あま雲よりのぞかくるたりまどのそぎのし葉もそぢあへ

むりも

あまやどり(詞花) 秋 公任 「いづりたよあきのゆくらんわが宿よあよひをりりあま

やどりせよ(催馬樂) 妹門 妹之門云々あまやどりのさやどりとてまうらんして

をさ(補) 元真集 乙をれたる女の家よあまやどりにてるたるを

あまま 雨のこれ なるなり (万) 十二 「雨間開而國見もせんをふるさとのそを橋のちりよけん

かも(補) 万 八 「うの花のそぎをとりほとゝぎは雨間もおりせこゆかきと

る(同) 八 「久方の雨間もおりせ雲がくりあきぞゆくかる早田ありがね(同) 十二

一「かきを月雨間もおりせふりよせわたが里のそとやどりからま(夫) 八 隆房 「み

そらよいへへの雲のこれぞのみあまゝもおりぬさみたれの空(同) 同 爲仲 「さそど

れのあまゝの空やふらぬらん木々のいづくの音をそみぬる

あまぶね 蟹舟 源若菜 下九 「あまぶねにいりべいおもひおくれけんありの浦よ

いさりせし君(同) 手習 五十 「さし遠くこぎとかるらんあま舟よのりおくれととい

そぐるゝ哉(和泉式部續集) 「そるるなる岸をこそ見れあま舟よのりよいでせび

こき出ざらま(山家) 下 「霞く波の初花をりりけてさくら鯛つる沖のあ

まふね(玉葉) 戀三 子女王 「こち風にかびきもてぬあま舟の身せうらとつゝこがれて

ぞふる(万) 十七 卅七 阿麻夫禰まらちかいぬき

あまころも 天衣 六帖 二 「あま衣をづるちとせのいとををも久しき物と我思ひ

あくよ(同) 同 「いりをり久しくもあらせあま衣をとめがなづるいとせりなり

あまころも(古) 雑上よみ 八しらす 「あまころもかされる身よありよのかたみの袖をかけて

わさる(源) 手習 六十 「あまころもかされる身よありよのかたみの袖をかけて

志のさん(六帖) 三 「すまの浦よ玉もかりすあまころも袖みつゝのひる時やな

き補(新續古)戀五忠「あま衣なほいりからん汐くまぬ身はたぬる、袖のうら波

あまこひ祈雨(新古)社司ともさぶねあまありてあまこひとべりけるついで

補(月詣)上藏人にて侍りけるあまこひのつりひよて雨ふらして云々瀨臣云續

紀延暦七年夏四月丁亥奉黑馬於丹生川上神祈雨これをすめて類史日本紀畧江

談抄古事談其外の雜史おろく見ゆ其式の禁秘抄よくて(風語隨筆)に云能因法

師雨乞の歌金葉集の範國朝臣伊豫守ありて下りし時とあり俊賴髓腦の實綱

とあり古今著聞集又清輔朝臣の袋草子の實國朝臣の時とあり金葉集の國の

一宮とありて髓腦袋草子の三島明神とかけり此三島伊豫國の一宮あるべし同ト

神あるよつけてや烏丸光廣卿止雨の歌奉られたる雨忽ちやみけるよ彼卿のあ

づまの道の記にくて其歌の「いのるより水せきとめよあまの川これもてまの

神のめぐみに

補あまこひ万十五「あまこひものもふときはほどいぎをわがすむ里よさあ

さとよもま

あまえ源若菜下兵部卿の宮あほひところのえおそて御心よつきておせけ

る事どもの皆さがひて世中もすまく人らへにおせさるよさてのとやのあ

まえてすぐはべきとおせて此こたりよけいさをとより給へれを○注ヒトリズミ

ニアマナヒテスグスベキカハト也(同)末摘九各契れる方よもあまえてえゆきわり

れ給ひ也(同)七ほどよりのあまえてと聞給へどめづらいきよ中々くちふたがるわ

ざりか(同)常夏七いとあまえたる物のりをりへそとたきしめ給へり(同)神六五十

かくのこと罪侍るともおせてつまどきをたのみよてあまえて侍るあるべし(と

りりへそや)二見るよかままゆければあまり薄墨よて何とこを見えねたるぞよと

いひまぎらそしてさしやりさればあまえて何事りあるとぞふいさたとくくく

てえみえせとてやえぬ(源)夕霧五あいかさあまえたるさまあるべしとてめします

(大鏡)八何事も聞しり見こく人のあるのひありあきいと口をしきわざありけ

ふのる事ども申をもわどの、聞こうせ給へさいと今すこし申さましきあり

といへささふらひもあまえたりき(榮)うらくの別三廿あさましう心うき事をいひ

出て人の御胸をやきこがななきをおふよき事かりやとていとそしたかくいひの

のしりければあまえて迹よけり(源)竹川十こよひの猶うぐひすよもさをいれ給へ

りしとの給ひ出しさればあまえてつめくふべきあとよもあらぬぞと思ひて○注、

耻シクセンコニアラズトカナルノ心ナリ(同)夕顔七夕ガホノ女あまそしたかき

房ドモノ

源かくわざとめりしければあまえていりし聞えんかと云々(大鏡)八天曆の御時に
 清涼殿の御前の梅の木枯さりしりば求させたまひし何のぬいの藏人にています
 りりし時承りてさき者の見えあらすきんちもとめよとのさまひしりばひと京ま
 りりありきしりども侍らざりし西の京のそこくある家いろよく咲たる木の
 様躰うつくしき侍りしを堀取りしりば家主の木は是ゆひ給へりてもて参れとい
 せたりしりば有やうこそいもて参りてさふらひしを何ぞとて御覽下ければ女
 の手よてかいてさべりける「勅なればいとものりしこし鶯のやどいと、いり
 こそへんとありけるよあやしく思召れて何者の家ぞと尋させ給ひければ貫之のぬ
 ーのみむすめの住所かりけり遺恨のわざをもたさりたるりかとてあまえおそし
 けり(狭)三ノ中聞給へるかりけりとおせせあまえて云々
あまえいたく(榮見はてぬ夢)十かくておそしまをもさすがよあまえいさくやおせ
 されけんごが御せらりらの彈正宮をかたらひきあえさせ給ひて此九の御方し聳と
 り聞えさせ給ふ(かけろふ日記)中文詞さていりしおせしたる事ありてりいと
 もう給へれば今のあまえいさくてまりり歸らんおともかたがるべきこしちりける
 かどこまりよかきて

あまてるかみ(狭)四ノ下あまてる神のいちどるくあらぬれ出たまひて(同)八ノあま
 てる神のほのめりし給ひけん事もあるやうありける事よてこそと云々

あまざそり(万)四ノ「雨ざそり常る君の久りさのようべの雨よこりよけんりも
 (同)八ノ「こしよありて春日やいづこ雨ざそり出てゆりねば戀つゝぞをる補(同)
四ノ「いそのかみふるとも雨よさそらめやいもよあそんといひてしものを(月詣)

能盛 「花をぞよ見せて、りへるかりがねのまゝて雨よはさそりしもせト

あまさへ(利)夫)廿六「鶴もすも松も生たるこゆるぎの磯のあまさへ千代をこそい
 のれ(落くち)四子二人むことりたれど今よこれよかゝりてこそありつめれあま
 さへうきそちのかぎりこそとせつれ

あまざら(頼政集)上ノ「卯のまかのかきねかりなりさとどのれあまざらしをる
 布とまつる

あまさうぞく(檜垣姫集)むりへ人みのかさかどありとくしといそがせをまり
 りまうしもあへぬまでいそぎちてあまさうぞくかどあさして

あまざり(万)十二「おもひ出る時はずかたさは山よとつ雨霧のけぬべくおも
 ほゆ

あまぎる(古)冬讀人「梅の花それとも見えぬ久方のあまぎる雪のなべてふれ、

(新古)春下讀岐「山さりと嶺のあらしちる花の月あまぎるあけがさの空補(玉葉)

春下爲家「山深き谷吹のなる春風ようきてあまぎる花のいらぬき(同)同爲教「さそひ行

花のこぞゑのさる風よくもらぬ雪ぞ空あまぎる(同)雜一「吹風の花あまぎる

霞までうらとりねさる春のあけがさの(風雅)春下徽安門院「吹たたる春のあらしの一とら

ひあまぎる花よかむ山もと(同)雜中後西園寺入道前太政大臣「見るまよあまぎるるぞう

きいづむ曉やとの村雲の空(同)春下但馬「雲まよふ風あまぎる雪りとてむらへば袖

花の香ぞする(新古)冬侍從「かさくもりあまぎる雪のふる郷をつもらぬさきよと

ふ人もがさ(續後拾)春下爲氏「花の色いそれとも見えぬ山ざくらあまぎる雲の春のあ

けがの(續千)春上爲定「けぬがうへに降りとぞとる梅がえの花あまぎる春のあけゆ

き(新後拾)春上雅經「晴やらぬ雲の雪けの春風よかすあまぎるよよれ山(新勅)

冬家隆「わどの原八十島しるくふる雪のあまぎる浪まがふ釣舟(拾愚)下「吹きた

るゆきの雲間を行月のあまぎる風よひりりそへつゝ

補あまみつ(赤染集)「雨水よ色いかへれどくれなるのこさもまさらむかそこの

花(拾玉)三「夕さちのさけしりつるをどりなむれぬく野べよのこるあま水

補あまどめり(散木)五月雨の心をよめる「雲これぬ五月さぬらよま衣むつり

いさまであまどめりせり

あまひと天人(源寄生)七十いよへあま人のくどりてびそのてをへける(狹)

一上中將の笛のねよあま人よ聞過し給いでおおしてさそひ給へるよ

補あまひと海士(公任卿集)「あま人のやくやもしるのさちをへば雲の波こそふか

く見えけれ(續後撰)戀二後法性寺入道前關白太政大臣「いさりさるよさのあま人今宵さへあふこ

とさそよ袖ぬらせとや(山家)下「あま人のいそしくへるひいさきものい小よそ

まぐりかうあふたよ(壬二)上「花のちる山かけてすむあま人のおもそぬ波よま

たうへるらん(堀初)師時「人いれむこひせすまのあま人のかきしなたれて過を

ころり(同)別師時「あま人のたまもりつむ舟をれどこぎこりる、へりなうり

けり(輔親集)たび人おりてあま人よものいひさる所よ(月詔)九覺綱「さし立の

松ふく風よおどろきていねのあま人ころも打かり(讚岐集)「あま人のまよもこそ

やけありむまよなうりつむるものがさりか

あまびこ天彦(古)雜下左近將監とけて侍りける時よ女のとふらひよおこせさりける

返事よよとてつりさしける小野の「あまびこのおとづれいとぞ今の思ふわれり人

りと身をさざる世よ○宣長云遠アマ彦トハ天上ノ人ナイヘリ物語共ニコレカレミ
エタリ餘材抄打聞ニ山彦ト同シトテ説タルハカナハズコレハ昔ヨリ誤リテ混レタ
ルヲモアリシニヤ○谷川云虚空ノヒマキ也トイヘリ顯昭ハ山彦ニ同シトイヘリア
マビコノ音羽ノ山ナドヨメリ

馬陸 (和名) 十九 蟲多類、馬陸、本草云馬陸一名百足和名阿コレハ京ニテ末比古

エンザ虫西國ニテダイロウト云(元輔集)まゝあまひこのをよりひを入れて同人よお
こせて侍りよ「虫のねのよるともいらでうつせ貝思とぬりたよもとめつるりか

あまびたひ 尼類(源をとめ)廿 御あまびとひ引つくろひうるはしき御こうちきあと
奉りそへて(同 手習)三十 さざをぎたる尼びたひの見つらぬよ

あまもよアメモヨノ所ニ出ス

あませ (盛衰) 十五 右衛門佐と申る女房の尼まかりて尼御前をバ畧して尼せと申
ける云々

あまをがた 尼姿(源 若菜) 上七 尼をがたいとかをらりよあてなるさまして

増補雅言集覽卷之四十四 終

